審査意見への対応を記載した書類（７月）

（目次）社会文化創造研究科　社会文化創造専攻（M）

１．芸術・スポーツ科学コースの学位名称「Master of Art and Culture」について、日本語学位名と対応していないため、名称の妥当性を説明し、必要に応じて名称を修正すること。
（名称に関する意見）　・・・・・・・・・４

２．研究科の英語名称を「Graduate School of Society, Culture and Creative Studies」としているが、学問分野の内容や通用性の観点から適切な名称であるかが不明瞭なため、海外の類例以外の根拠も示すなどして妥当性を説明し、必要に応じて英語名称を修正すること。
（名称に関する意見）　・・・・・・・・・５

３．「考古人類学プログラム」という名称が、当該プログラムが特定分野に特化していることを適切に表現しておらず、学生が履修するにあたり誤解等が生じるおそれがあると考えられるため、名称の妥当性を説明し、必要に応じて修正すること。
（教育課程等に関する意見）　・・・・・・・・・９

４．学際的な教育課程になっているが、修士課程修了後、実社会で高度専門職業人として活躍できるのか不明確である。例えば、企業経営を研究テーマとした場合の履修モデルが示されているが、企業経営に関する科目が僅かしなく、このカリキュラムで企業経営に関する専門的知識を備えた人材が育成できるのか不明確であるため、この点について妥当性を説明するか、必要に応じて修正すること。
（教育課程等に関する意見）　・・・・・・・・・16

５．「複数・異分野連携指導体制」について、計画書の内容だけでは実効性が十分か不明確であるため、運用面の工夫も含めて具体的に説明すること。
（教育課程等に関する意見）　・・・・・・・・・18

６．学士課程との接続及び人材養成像を踏まえると、デザイン関連科目を設定することが望ましいと考えられるため、対応方針について再考すること。
（教育課程等に関する意見）　・・・・・・・・・20

７．造形芸術プログラムの教育課程において、日本彫刻史や工芸史など、重要分野の基礎知識を提供する科目が含まれていないように思われるが、このような教育課程としている理由及び妥当性について、養成する人材像やディプロマポリシーと関連付けて具体的に説明するとともに、必要に応じてカリキュラムを修正すること。
（教育課程等に関する意見）　・・・・・・・・・22

８．「地域的な展開を新たに創造・実践 できる人材を養成する」という研究科の趣旨に照らすと、教育課程には、よりローカルな民俗文化や伝統芸能との関わりに関する内容を含めることが望ましいため、対応方針を再考すること。
（教育課程等に関する意見）　・・・・・・・・・23

９．スポーツ科学プログラムの履修モデルについて、養成する人物像・想定する就職先からすれば、「生涯スポーツ特論」は高度専門科目の主要科目の一つになると考えられ、履修モデルの中に含まれるべきと考えられるため、本履修モデルの妥当性を説明するか、必要に応じて適切に修正すること。
（教育課程等に関する意見）　・・・・・・・・・27

10．「スポーツ科学特別研究Ⅰ」及び「スポーツ科学特別研究Ⅱ」では、スポーツ心理学の研究指導が行われるものと見受けられるが、そのための基礎となる科目が不足していると考えられるため、本コースの科目配置の妥当性を説明し、必要に応じて適切に修正すること。
（教育課程等に関する意見）　・・・・・・・・・29

11．芸術・スポーツ科学コースにおいて「健康で豊かな社会の創造…」という表現が散見されるが、健康とスポーツ科学がどのように関わるのか、具体的に説明すること。
（教育課程等に関する意見）　・・・・・・・・・31

12．本研究科では、指導教員が「履修指導・研究指導面だけでなく生活・精神面などの相談など、多岐にわたる修学支援を行う」とされているが、必ずしもメンタルヘルスを専門としない指導教員に「精神面」の相談にも対応させるためには、何らかの研修システムなど、制度運用上の配慮が求められるため、その点についての対応を具体的に説明すること。
（その他）　・・・・・・・・・32

13．教員組織の編成に関して、各専門領域の高度な研究能力や実践能力を有し、指導経験を有する教員が適切に配置された教員体制となっていることを説明すること。
（その他）　・・・・・・・・・34

14．臨床心理学コースにおける教員負担について、学外実習に係る指導や、教員自身の研究時間の確保も必要となることから、適切な教員負担となっているか不明確なため、学外での指導と学内での授業・実習等に関して時間割上の工夫など、特定の教員に負担が偏ることのないような仕組みとなっていることを説明すること。
また、学生についても同様に、公認心理師・臨床心理士の両受験資格の取得を目指す学生や心理学以外の教育課程を経た学生にとっても、学内外の実習や事前事後学習及び論文作成が十分行えるような、適切な学生負担となっていることを説明すること。
（その他）　・・・・・・・・・35

（名称に関する意見）社会文化創造研究科　社会文化創造専攻（M）

１．芸術・スポーツ科学コースの学位名称「Master of Art and Culture」について、日本語学位名と対応していないため、名称の妥当性を説明し、必要に応じて名称を修正すること。

（対応）

ご指摘を踏まえ、英語表記を「Master of Arts」に修正し、日本語学位名である修士（学術）と対応させる。

社会文化創造研究科は、従来の学問領域の垣根を低くして横断的に学修することを大きな特徴としている。また、芸術・スポーツ科学コースのディプロマポリシーには「芸術・スポーツ科学に関する高度で専門的な研究を遂行することができる深い知識と高度な技能を有する」ことを記している。Artは、「芸術」を意味する他、専門的で高度な技術を広く指すことから、芸術・スポーツ科学コースの学位、修士（学術）の英語表記を「Master of Arts」とする。

（新旧対照表）基本計画書

新	旧
1ページ 新設学部等の概要 　学位又は称号 　　[Master of Arts]	1ページ 新設学部等の概要 　学位又は称号 　　[Master of Art and Culture]

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
17ページ ３　研究科、専攻の名称・学位の名称 （２）学位の名称 　芸術・スポーツ科学コース　　修士（学術） 　Master of Arts	17ページ ３　研究科、専攻の名称・学位の名称 （２）学位の名称 　芸術・スポーツ科学コース　　修士（学術） 　Master of Art and Culture

（名称に関する意見）社会文化創造研究科　社会文化創造専攻（M）

２．研究科の英語名称を「Graduate School of Society, Culture and Creative Studies」としているが、学問分野の内容や通用性の観点から適切な名称であるかが不明瞭なため、海外の類例以外の根拠も示すなどして妥当性を説明し、必要に応じて英語名称を修正すること。

（対応）

ご指摘を踏まえ、英語名称を「Graduate School of Creative Studies in Society and Culture」に修正する。なお、研究科の英語名称修正に伴い、専攻名も「Department of Creative Studies in Society and Culture」に修正する。

設置の趣旨にある通り、社会文化創造研究科の名称は、「社会文化」と「創造」の２つの理念によって構成され、教育研究対象である「社会文化」に、教育研究目的である「創造」を加味している。旧英語名称は、「対象」と「目的」が並列関係であったが、新名称では、主眼である目的を指すCreative Studyを先に位置付け、その後ろに対象であるSociety and Cultureを位置付け、両者の関係性をより適切に示した。海外の類例の他、研究科の理念や学問分野の内容、通用性の観点から、新たな価値を内包する解決策について創造的に追及するという本研究科の理念を適切に表現し、クリエイター、クリエイティブ等のカタカナは社会的に頻繁に使われ、通用性もあることから、Creative Studiesとした。

本研究科では、人文科学、社会科学、臨床心理学、芸術学およびスポーツ科学の視点から「社会」と「文化」の関連について俯瞰的に捉えて学際的に学ぶことを主眼としていることから、SocietyとCultureは研究対象を表す英語として、また、研究科の日本語名称に対応した英語として明解かつ妥当と思われる。なお名称には、研究の「目的」と「対象」を含め、研究の「視点、軸足」である、人文科学、社会科学、臨床心理学、芸術学、スポーツ科学、を個別に加味してはいないが、例えば、早稲田大学のスポーツ科学部の説明にもあるように、スポーツは、競技、指導、観戦等、様々なスタイルで人々が関わる「文化的・社会的事象」である。スポーツの視点（軸足）で、社会（Society）と文化（Culture）の関わりを捉え、従来の学問領域の垣根を低くし、自然科学と社会科学双方の学問基盤を活用して科学的に考究することが、本研究科（スポーツ科学プログラム）の特色の一つでもある。なお、SocietyとCultureはいずれも平易な英語で通用性も高い。

（新旧対照表）基本計画書

新	旧
1ページ 新設学部等の概要 　新設学部等の名称 　　社会文化創造研究科 　　[Graduate School of Creative Studies in	1ページ 新設学部等の概要 　新設学部等の名称 　　社会文化創造研究科 　　[Graduate School of Society, Culture and

Society and Culture] 社会文化創造専攻 [Department of Creative Studies in Society and Culture]	Creative Studies] 社会文化創造専攻 [Department of Society, Culture and Creative Studies]

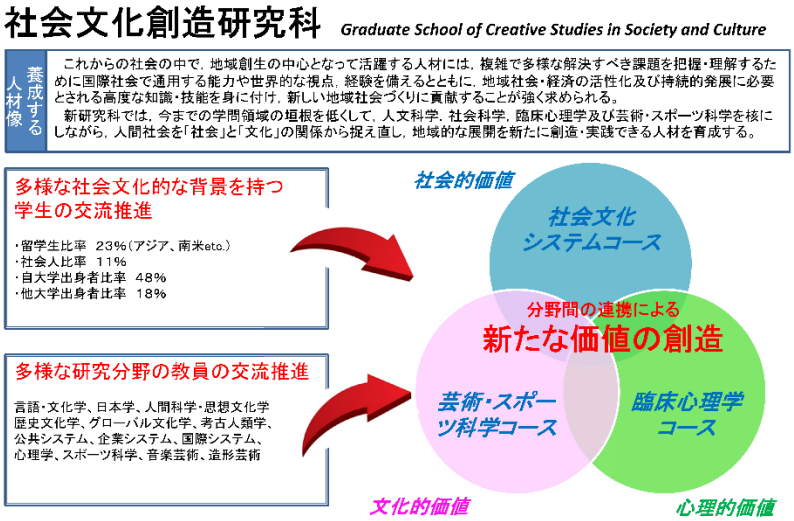
（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
8ページ １　設置の趣旨及び必要性 （７）新研究科・新専攻の概要 社会文化創造研究科のイメージ図 16ページ ３　研究科、専攻の名称・学位の名称 （１）研究科及び専攻の名称 １）研究科の名称 本研究科の名称は，「社会文化」と「創造」によって構成される。この名称は，２つの理念を表現している。理念の一つは〈社会文化〉である。既存の社会文化システム研究科が，社会や文化を一つのシステムとして総合的に把握し，人文科学と社会科学の諸領域を専門的に学びながら，社会が抱える今日的な課題に 積極的に取り組み，創造的・実践的に解決することをめざしてきた。また，地域教育文化研究科は，地域社会における今日のさまざまな課題に柔軟に対応し，臨床心理学と芸術・スポーツ科学を専門的に学びながら，現代社会における心の問題をケアすることと文化の担い手となり得ることをめざして実践的な研究を行ってきた。本研究科では，両研究科の基盤となっている＜社会文化＞を本研究科の教育研究対象となる基本概念として継承する。学生は社会と文化の領域から自分の課題を設定して，その課題解決の方法を追究し，新たな価値を創造することをめざす。 理念の二つ目は，〈創造〉である。〈創造〉とは，課題解決の方向性を示す理念で，かつ本研究科の教育研究目的を表す。グローバル化が進む現代社会において，日本の地方では人口減少が進行し，地域の活性化や文化の維持などが大きな課題となっている。これらの課題を解決するために，新たな価値（社会的価値、文化的価値及び心理的価値など）を内包する解決策について創造的・実践的に追究・構想しなければならない。現代の社会や文化にまつわる課題を解決するための理念が〈創造〉であり，本研究科の特徴である芸術・スポーツ科学コースを設けるなど，教育研究の特長が＜創造＞である。 したがって，本研究科の「社会文化創造」という名称は，「社会文化」という教育研究対象となる基本概念に，「創造」という教育研究目的を加味したものである。 また、本研究科の英語表記については、本研究科の日本語名称が「社会文化」と「創造」の２つ	8ページ １　設置の趣旨及び必要性 （７）新研究科・新専攻の概要 社会文化創造研究科のイメージ図 16ページ ３　研究科、専攻の名称・学位の名称 （１）研究科及び専攻の名称 １）研究科の名称 本研究科の名称は，「社会文化」と「創造」によって構成される。この名称は，２つの理念を表現している。理念の一つは〈社会文化〉である。既存の社会文化システム研究科が，社会や文化を一つのシステムとして総合的に把握し，人文科学と社会科学の諸領域を専門的に学びながら，社会が抱える今日的な課題に 積極的に取り組み，創造的・実践的に解決することをめざしてきた。また，地域教育文化研究科は，地域社会における今日のさまざまな課題に柔軟に対応し，臨床心理学と芸術・スポーツ科学を専門的に学びながら，現代社会における心の問題をケアすることと文化の担い手となり得ることをめざして実践的な研究を行ってきた。本研究科では，両研究科の基盤となっている＜社会文化＞を本研究科の教育研究対象となる基本概念として継承する。学生は社会と文化の領域から自分の課題を設定して，その課題解決の方法を追究し，新たな価値を創造することをめざす。 理念の二つ目は，〈創造〉である。〈創造〉とは，課題解決の方向性を示す理念で，かつ本研究科の教育研究目的を表す。グローバル化が進む現代社会において，日本の地方では人口減少が進行し，地域の活性化や文化の維持などが大きな課題となっている。これらの課題を解決するために，新たな価値（社会的価値、文化的価値及び心理的価値など）を内包する解決策について創造的・実践的に追究・構想しなければならない。現代の社会や文化にまつわる課題を解決するための理念が〈創造〉であり，本研究科の特徴である芸術・スポーツ科学コースを設けるなど，教育研究の特長が＜創造＞である。 したがって，本研究科の「社会文化創造」という名称は，「社会文化」という教育研究対象となる基本概念に，「創造」という教育研究目的を加味したものである。 また，本研究科の英語表記については，名称の要素を教育研究の対象を表すキーワードになるよ

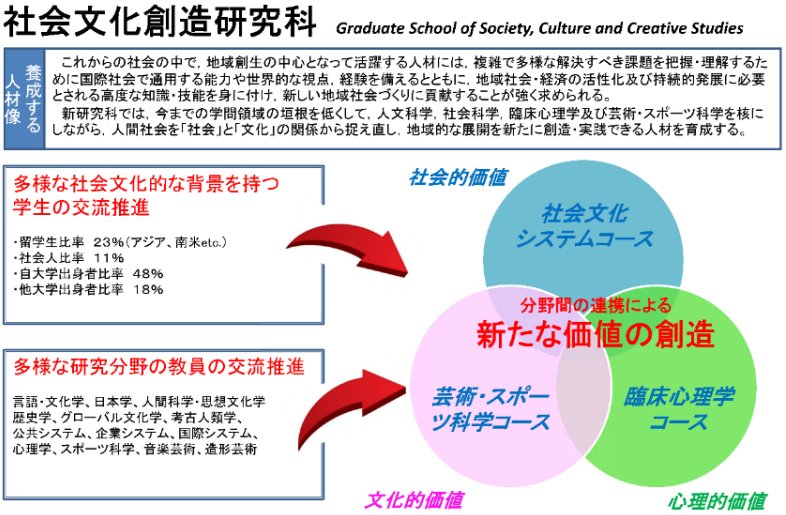
の理念によって構成され、教育研究対象である「社会文化」に、教育研究目的である「創造」を加味していることから、主眼である目的を指すCreative Studyを先に位置付け、その後ろに対象であるSociety and Cultureを位置付け、両者の関係性をより適切に示した。研究科の理念や学問分野の内容、通用性の観点から、新たな価値を内包する解決策について創造的に追及するという本研究科の理念を適切に表現し、クリエイター、クリエイティブ等のカタカナは社会的に頻繁に使われ、通用性もあることから、Creative Studiesとした。本研究科では、人文科学、社会科学、臨床心理学、芸術学およびスポーツ科学の視点（軸足）から「社会」と「文化」の関連について俯瞰的に捉えて学際的に学ぶことを主眼としていることから、SocietyとCultureは、研究対象を表す英語として、また、研究科の日本語名称に対応した英語として明解かつ妥当と思われる。また、SocietyとCultureはいずれも平易な英語で通用性も高い。海外等の類例は以下に示す通りである。 ○英語表記：Graduate School of Creative Studies in Society and Culture ※1 海外の表記例 University of Amsterdam（オランダ） The Master's programme in Literature, Culture and Society https://gsh.uva.nl/content/masters/literature-culture-and-society-literary-studies/study-programme/specialisations/specialisations.html Western Sydney University（オーストラリア） Institute for Culture and Society https://www.westernsydney.edu.au/ics College of Education（アメリカ） Department of Education, Culture and Society https://education.utah.edu/ College for Creative Studies（アメリカ） https://www.collegeforcreativestudies.edu/ University of California, Santa Barbara（アメリカ） College of Creative Studies https://ccs.ucsb.edu/ ※2 参考（国内） （削除）	う，加えて「創造」には，社会と文化の諸課題を対象に教育研究を行い，新たな価値を創造し，かつ持続可能な地域社会や文化を創造的・実践的にも追究するという意味が明確になるよう，修正を行った。 さらに，本研究科の英語表記については，国際通用性という観点では，以下に示す海外の類似した表記を参考に作成したものである。 ○英語表記：Graduate School of Society, Culture and Creative Studies ※1 海外の表記例 University of Amsterdam（オランダ） The Master's programme in Literature, Culture and Society https://gsh.uva.nl/content/masters/literature-culture-and-society-literary-studies/study-programme/specialisations/specialisations.html Western Sydney University（オーストラリア） Institute for Culture and Society https://www.westernsydney.edu.au/ics College of Education（アメリカ） Department of Education, Culture and Society https://education.utah.edu/ College for Creative Studies（アメリカ） https://www.collegeforcreativestudies.edu/ University of California, Santa Barbara（アメリカ） College of Creative Studies https://ccs.ucsb.edu/ ※2 参考（国内） 岐阜女子大学　文化創造研究科 Graduate School of Cultural Development

愛知淑徳大学　文化創造研究科 Graduate School of Creativity and Culture 青山学院大学　総合文化政策学研究科 Graduate School of Cultural and Creative Studies （削除） 新潟大学　現代社会文化研究科 Graduate School of Modern Society and Culture	愛知淑徳大学　文化創造研究科 Graduate School of Creativity and Culture 青山学院大学　総合文化政策学研究科 Graduate School of Cultural and Creative Studies 岡山大学　社会文化科学研究科 Graduate School of Humanities and Social Sciences 新潟大学　現代社会文化研究科 Graduate School of Modern Society and Culture

（新）社会文化創造研究科のイメージ図



（旧）社会文化創造研究科のイメージ図



（教育課程等に関する意見）社会文化創造研究科　社会文化創造専攻（M）

３．「考古人類学プログラム」という名称が、当該プログラムが特定分野に特化していることを適切に表現しておらず、学生が履修するにあたり誤解等が生じるおそれがあると考えられるため、名称の妥当性を説明し、必要に応じて修正すること。

（対応）

プログラムの内容、これまでの教育実績を踏まえると、考古人類学プログラムという名称は妥当であるといえるが、名称の妥当性を保証するため、人材育成像、授業科目名、授業科目の概要の一部を修正し、世界各地の事例を取り上げることなどを示す。

また、パンフレット、ホームページなどで、本プログラムがアンデス・ナスカの分野に教育研究の中心が置かれていることを説明し、一般的な考古人類学を学ぼうとする学生との間で齟齬が生じないように努める。

（以下、プログラムの内容、これまでの教育実績の説明）

考古人類学プログラムでは、人類学の理論に重点を置いて過去の社会について学ぶ。授業では、アンデス地域を対象とした考古学だけでなく、世界各地の事例（ヨーロッパ、オセアニア、アジア、北米など）を取り上げる。なおアンデス地域を主な対象として取り上げる授業でも、こうした世界各地の事例との比較によって、過去の社会を通文化的に議論できる視点を養うことを目的としている。そこで本プログラムは、アンデス・ナスカの地域研究に限定されたものではなく、過去の社会を人類学的な視点から研究する「考古人類学」として位置づけられる。これまでの修士課程への進学者はアンデス・ナスカの分野に限らず、モンゴル・アイヌ・日本などを対象とした研究を修士論文としてまとめられた方が含まれる。彼らは博士課程に進学したり、博物館に就職している。

（新旧対照表）教育課程等の概要

新	旧
2ページ 科目区分 高度専門科目 社会文化システムコース 考古人類学プログラム ［人類学・考古学特論Ａ］ ［人類学・考古学特論Ｂ］ ［人類学・考古学特論Ｃ］ ［人類学・考古学特論Ｄ］ ［人類学・考古学特別演習Ａ］ ［人類学・考古学特別演習Ｂ］ ［人類学・考古学特別演習Ｃ］ ［人類学・考古学特別演習Ｄ］	2ページ 科目区分 高度専門科目 社会文化システムコース 考古人類学プログラム ［人類学・アンデス考古学特論Ａ］ ［人類学・アンデス考古学特論Ｂ］ ［人類学・アンデス考古学特論Ｃ］ ［人類学・アンデス考古学特論Ｄ］ ［人類学・アンデス考古学特別演習Ａ］ ［人類学・アンデス考古学特別演習Ｂ］ ［人類学・アンデス考古学特別演習Ｃ］ ［人類学・アンデス考古学特別演習Ｄ］

（新旧対照表）授業科目の概要

新	旧
19ページ ［人類学・考古学特論Ａ］ ［人類学・考古学特論Ｂ］ ［人類学・考古学特論Ｃ］ 授業のテーマは地域間交流と社会の複雑化である。到達目標は研究動向を把握し、基礎理論や概念、方法論的枠組みをみにつけること、先行研究を批判的に検討することで、自らの研究テーマを設定し、先行研究のなかに位置づけることができることである。 (78　山本　睦/15回) 初回：ガイダンス、第２回：交換と交流に関する理論的動向、第３回：長距離交易と社会変化、第４回：地域間交流の社会的役割、第５回：交流と社会政治的変化、第６回：外来物資の概念、第７回：交流と生業の変化、第８回：交換財がもつ象徴性についての研究事例、第９回：交換と社会的アイデンティティ、第１０回：外来物資の社会的役割、第１１回：奢侈品とその交換、第１２回：交換される物資の社会的役割、第１３回：日常的な生活とかかわる地域間交流、第１４回：先史社会における交換システム、１５回：討論を担当する。 (24　坂井正人・60　松本　剛・71　松本雄一/1回)（共同） 第１５回：討論を担当する。 ［人類学・考古学特論Ｄ］ 授業のテーマは埋葬である。この授業では人間の生や死、祖先といった概念にまつわる人類学的な議論について広く理解し、それを理論的な土台として、アンデス地域における埋葬について考察する。この講義を履修した学生が、先行研究の議論を批判的に概観できるようになるとともに、手付かずの問題を見つけ、研究テーマとして設定できるようになることを到達目標とする。 (60　松本　剛/15回) 初回：授業の進め方に関するガイダンス、第２～３回：人類学からみた生・死・祖先、第４～８回：アンデスにおける生・死・祖先、第９～１０回：埋葬へのプロセス・ポストプロセス考古学的アプローチ、第１１～１２回：「なぜ死者・祖先を祀るのか」、第１３～１４回：ペルー北海岸の事例紹介、第１５回：討論を担当する。 (24　坂井正人・71　松本雄一・78　山本　睦/1回)（共同） 第１５回：討論を担当する。 ［人類学・考古学特別演習Ａ］ この授業では、考古学における記憶に関する近	19ページ ［人類学・アンデス考古学特論Ａ］ ［人類学・アンデス考古学特論Ｂ］ ［人類学・アンデス考古学特論Ｃ］ 授業のテーマはアンデスにおける地域間交流と社会の複雑化である。到達目標は研究動向を把握し、基礎理論や概念、方法論的枠組みをみにつけること、先行研究を批判的に検討することで、自らの研究テーマを設定し、先行研究のなかに位置づけることができることである。 (78　山本　睦/15回) 初回：ガイダンス、第２回：交換と交流に関する理論的動向、第３回：長距離交易と社会変化、第４回：地域間交流の社会的役割、第５回：交流と社会政治的変化、第６回：外来物資の概念、第７回：交流と生業の変化、第８回：交換財がもつ象徴性についての研究事例、第９回：交換と社会的アイデンティティ、第１０回：外来物資の社会的役割、第１１回：奢侈品とその交換、第１２回：交換される物資の社会的役割、第１３回：日常的な生活とかかわる地域間交流、第１４回：先史社会における交換システム、１５回：討論を担当する。 (24　坂井正人・60　松本　剛・71　松本雄一/1回)（共同） 第１５回：討論を担当する。 ［人類学・アンデス考古学特論Ｄ］ 授業のテーマはアンデスの埋葬である。この授業では人間の生や死、祖先といった概念にまつわる人類学的な議論について広く理解し、それを理論的な土台として、アンデス地域における埋葬について考察する。この講義を履修した学生が、先行研究の議論を批判的に概観できるようになるとともに、手付かずの問題を見つけ、研究テーマとして設定できるようになることを到達目標とする。 (60　松本　剛/15回) 初回：授業の進め方に関するガイダンス、第２～３回：人類学からみた生・死・祖先、第４～８回：アンデスにおける生・死・祖先、第９～１０回：埋葬へのプロセス・ポストプロセス考古学的アプローチ、第１１～１２回：「なぜ死者・祖先を祀るのか」、第１３～１４回：ペルー北海岸の事例紹介、第１５回：討論を担当する。 (24　坂井正人・71　松本雄一・78　山本　睦/1回)（共同） 第１５回：討論を担当する。 ［人類学・アンデス考古学特別演習Ａ］ この授業では、考古学における記憶に関する近

年の理論的展開を把握した上で、文字を必要としなかった諸社会において発展した岩絵、地上絵、土器や壁画などの図像表現や書記技術に注目して、記憶・記録システムに関する最近の研究成果を理解する。新旧両大陸の事例を用いて議論する。 (24　坂井正人/15回) 初回：授業の進め方に関するガイダンス、第２～４回：記憶の考古学、第５～７回：アンデスの図像表現（土器と壁画)、第８～１０回：アンデスの地上絵、第１１～１４回：アンデスの書記技術（キープとセケ)、第１５回：討論を担当する。 (60　松本　剛・71　松本雄一・78　山本　睦/1回)（共同) 第１５回：討論を担当する。	年の理論的展開を把握した上で、文字を必要としなかったアンデス文明において発展した土器や壁画などの図像表現、地上絵、キープやセケといった書記技術に注目して、アンデス文明の記憶・記録システムに関する最近の研究成果を理解する。メソアメリカやアマゾンとの比較を通じて、アンデス文明特有の社会展開や価値観を理解することを目標とする。 (24　坂井正人/15回) 初回：授業の進め方に関するガイダンス、第２～４回：記憶の考古学、第５～７回：アンデスの図像表現（土器と壁画)、第８～１０回：アンデスの地上絵、第１１～１４回：アンデスの書記技術（キープとセケ)、第１５回：討論を担当する。 (60　松本　剛・71　松本雄一・78　山本　睦/1回)（共同) 第１５回：討論を担当する。
［人類学・考古学特別演習Ｂ］ 授業のテーマは複合的社会である。この授業では古代アンデスの複合的社会に焦点を当て、その形成から崩壊に至る過程を、通文化的視点から理論および事例研究の双方について論じる。受講者が考古人類学の理論を理解し、アンデス考古学におけるその活用ができるようになることが目標である。 (71　松本雄一/15回) 初回：授業の進め方に関するガイダンス、第２回：複合的社会、第３～５回は複合的社会の理論（１)：文化史学派、第６～８回：複合的社会の理論（２)：プロセス考古学、第９～１０回：複合的社会の理論（３)：ポストプロセス考古学、第１１～１２回：アンデス考古学における複合社会の研究（１）形成期～モチェ文化、第１３～１４回：アンデス考古学における複合社会の研究（２）ワリ帝国～インカ帝国、第１５回：討論を担当する。 (24　坂井正人・60　松本　剛・78　山本　睦/1回)（共同) 第１５回：討論を担当する。	［人類学・アンデス考古学特別演習Ｂ］ 授業のテーマは先スペイン期アンデスの複合的社会である。この授業では古代アンデスの複合的社会に焦点を当て、その形成から崩壊に至る過程を理論と事例研究の双方から論じる。受講者が人類学的考古学の理論を理解し、アンデス考古学におけるその活用ができるようになることが目標である。 (71　松本雄一/15回) 初回：授業の進め方に関するガイダンス、第２回：複合的社会、第３～５回は複合的社会の理論（１)：文化史学派、第６～８回：複合的社会の理論（２)：プロセス考古学、第９～１０回：複合的社会の理論（３)：ポストプロセス考古学、第１１～１２回：アンデス考古学における複合社会の研究（１）形成期～モチェ文化、第１３～１４回：アンデス考古学における複合社会の研究（２）ワリ帝国～インカ帝国、第１５回：討論を担当する。 (24　坂井正人・60　松本　剛・78　山本　睦/1回)（共同) 第１５回：討論を担当する。
［人類学・考古学特別演習Ｃ］ 授業のテーマは境界・フロンティアである。この授業では人間による空間分化や、分化した空間自体が人々の生活に与える影響について議論する。到達目標は研究動向を把握し、基礎理論や概念、方法論的枠組みをみにつけること、先行研究を批判的に検討することで、自らの研究テーマを設定し、先行研究のなかに位置づけることができることである。アンデス地域を主な対象として取り上げるが、通文化的視点を重視し、他地域の事例についても視野に入れて検討する。 (78　山本　睦/15回) 初回：ガイダンス、第２回：境界・ボーダー・フロンティアの概念、第３回：境界をめぐる理論的	［人類学・アンデス考古学特別演習Ｃ］ 授業のテーマはアンデスにおける境界・フロンティアである。この授業では人間による空間分化や、分化した空間自体が人々の生活に与える影響について議論する。到達目標は研究動向を把握し、基礎理論や概念、方法論的枠組みをみにつけること、先行研究を批判的に検討することで、自らの研究テーマを設定し、先行研究のなかに位置づけることができることである。 (78　山本　睦/15回) 初回：ガイダンス、第２回：境界・ボーダー・フロンティアの概念、第３回：境界をめぐる理論的

枠組み、第４回：空間の概念、第５回：ボーダーとフロンティアが成立するプロセス、第６回：境界・ボーダー・フロンティアに関する事例研究、第７回：フロンティアをめぐる理論的動向、第８～９回：フロンティアの拡大についての研究事例、第１０～１２回：フロンティアにおける衝突や統合についての研究事例、第１３～１４回：フロンティアにおける文化的伝統の創造、１５回：討論を担当する。 (24　坂井正人・60　松本　剛・71　松本雄一/1回)（共同） 第１５回：討論を担当する。 ［人類学・考古学特別演習Ｄ］ 　授業のテーマは儀礼である。この授業では、儀礼について世界各地を対象とした人類学的な研究や議論について広く理解し、それを理論的な土台として、アンデス地域における儀礼について考察する。この講義を履修した学生が、特定の研究分野において、先行研究による理論的・方法論的議論を批判的に概観できるようになるとともに、その文脈の中でいまだ研究が足りていない、もしくは手付かずの問題を見つけ、研究テーマとして設定できるようになることを到達目標とする。 (60　松本　剛/15回) 初回：授業の進め方に関するガイダンス、第２～４回：儀礼の人類学的研究の歴史、第５回：儀礼の考古学的研究、第７～１４回：アンデス考古学の研究事例の紹介、第１５回：討論を担当する。 (24　坂井正人・71　松本雄一・78　山本　睦/1回)（共同） 第１５回：討論を担当する。 ［考古人類学特別演習］ 　この授業ではペルー南海岸のナスカ台地周辺で成立した諸社会を取り上げ、それを世界各地の他の事例との比較において、考古人類学的に議論できる視点を養うことを目的とする。この授業ではまずナスカ地域および近郊の考古学に関する先行研究を理解した上で、神殿・居住地・図像表現・資源・セトルメント･パターンに注目して、通文化的視点から理論および事例研究の双方について論じる。これによって現在の研究の論点を把握し、今後の研究のあり方について検討する。 (24　坂井正人/15回) 初回：授業の進め方に関するガイダンス、第２～４回：ナスカ地域の考古学、第５～６回：神殿、第７～８回：居住地、第９～１０回：図像表現、第１１～１２回：資源、第１３～１４回：セトルメント・パターン、第１５回：討論を担当する。 (60　松本　剛・71　松本雄一・78　山本　睦/1回)（共同） 第１５回：討論を担当する。	枠組み、第４回：空間の概念、第５回：ボーダーとフロンティアが成立するプロセス、第６回：境界・ボーダー・フロンティアに関する事例研究、第７回：フロンティアをめぐる理論的動向、第８～９回：フロンティアの拡大についての研究事例、第１０～１２回：フロンティアにおける衝突や統合についての研究事例、第１３～１４回：フロンティアにおける文化的伝統の創造、１５回：討論を担当する。 (24　坂井正人・60　松本　剛・71　松本雄一/1回)（共同） 第１５回：討論を担当する。 ［人類学・アンデス考古学特別演習Ｄ］ 　授業のテーマはアンデスの儀礼である。この授業では、儀礼についての人類学的な研究や議論について広く理解し、それを理論的な土台として、アンデス地域における儀礼について考察する。この講義を履修した学生が、特定の研究分野において、先行研究による理論的・方法論的議論を批判的に概観できるようになるとともに、その文脈の中でいまだ研究が足りていない、もしくは手付かずの問題を見つけ、研究テーマとして設定できるようになることを到達目標とする。 (60　松本　剛/15回) 初回：授業の進め方に関するガイダンス、第２～４回：儀礼の人類学的研究の歴史、第５回：儀礼の考古学的研究、第７～１４回：アンデス考古学の研究事例の紹介、第１５回：討論を担当する。 (24　坂井正人・71　松本雄一・78　山本　睦/1回)（共同） 第１５回：討論を担当する。 ［考古人類学特別演習］ 　授業のテーマはナスカ地域の考古学である。主な研究対象はナスカ台地周辺の社会である。ただし比較研究のために、パルパ谷、チンチャ谷の社会についても扱う。この授業では、ナスカ地域および近郊の考古学に関する先行研究を広く理解することによって、この地域の研究の理論的な背景を理解するとともに、現在の研究の論点を把握し、今後の研究のあり方について検討することを目標とする。 (24　坂井正人/15回) 初回：授業の進め方に関するガイダンス、第２～４回：ナスカの地上絵に関する考古学、第５～７回：ナスカ谷の神殿、第８～９回：ナスカ谷の居住地、第１０～１１回：ナスカ谷の水路、第１２～１３回：パルパ谷のセトルメントと地上絵、第１４回：チンチャ谷のセトルメントと地上絵、第１５回：討論を担当する。 (60　松本　剛・71　松本雄一・78　山本　睦/1回)（共同） 第１５回：討論を担当する。

［考古人類学特別研究Ⅰ・考古人類学特別研究Ⅱ］ 　特別研究Ⅰでは，各自の研究計画に即し，修士論文の作成に向けて，必要な基礎的な研究指導を行う。各自の研究計画に即した研究指導を行うほか，各自の研究に必要な基本的な手法等についても指導し，修士論文のための準備を整えさせる。 調査、報告、議論などの仕方を身につける。それにより、修士論文作成の基本を身につけ、修士論文のテーマを確定できるようになる。 　特別研究Ⅱでは，特別研究Ⅰにおいて確定した研究課題を修士論文として完成させるための具体的な指導を行う。研究課題の意義，研究方法，資料の分析方法，論文作成の手法など，修士論文の作成に必要な多面的な指導を行う。 調査、報告、議論などの仕方を身につける。それにより、特別研究Ⅰによって確定した修士論文を完成させる。 (24　坂井正人) 建築景観・記憶・書記技術を人類学的な視点から分析すること。 (60　松本　剛) 儀礼や埋葬を主な研究対象として、記号論的・実践理論的なアプローチを試みている。 (71　松本雄一) 複合的社会の形成を専門とし、文明の初期形成、帝国の地方支配に関する研究を行っている。 (78　山本　睦) 地域間交流と社会変化との相関を主な研究対象として、実証的かつ実践論的なアプローチを試みている。	［考古人類学特別研究Ⅰ・考古人類学特別研究Ⅱ］ 　特別研究Ⅰでは，各自の研究計画に即し，修士論文の作成に向けて，必要な基礎的な研究指導を行う。各自の研究計画に即した研究指導を行うほか，各自の研究に必要な基本的な手法等についても指導し，修士論文のための準備を整えさせる。 調査、報告、議論などの仕方を身につける。それにより、修士論文作成の基本を身につけ、修士論文のテーマを確定できるようになる。 　特別研究Ⅱでは，特別研究Ⅰにおいて確定した研究課題を修士論文として完成させるための具体的な指導を行う。研究課題の意義，研究方法，資料の分析方法，論文作成の手法など，修士論文の作成に必要な多面的な指導を行う。 調査、報告、議論などの仕方を身につける。それにより、特別研究Ⅰによって確定した修士論文を完成させる。 (24　坂井正人) アンデス文明における建築景観・記憶・書記技術を現象学的な視点から分析すること。 (60　松本　剛) 中央アンデスにおける儀礼や埋葬を主な研究対象として、記号論的・実践理論的なアプローチを試みている。 (71　松本雄一) アンデスにおける複合的社会の形成を専門とし、文明の初期形成、帝国の地方支配に関する研究を行っている。 (78　山本　睦) 中央アンデスにおける地域間交流と社会変化との相関を主な研究対象として、実証的かつ実践論的なアプローチを試みている。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
23ページ ４　教育課程の編成の考え方及び特色 （３）教育課程編成の内容・特色 　③ 〔社会文化システムコース 　【考古人類学プログラム】〕 　ナスカ地上絵の世界的研究拠点として，政府などの公的機関において国際協力を推進できる人材，国内外の文化財保護事業を推進しその発展に貢献できる人材，考古人類学及びアンデス文明の先進的研究を牽引する研究者を育成する教育プログラムである。 ○ページ ６　教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件 （２）履修指導 　２）履修モデル 　【履修モデル】社会文化システムコース・考古人類学プログラム	23ページ ４　教育課程の編成の考え方及び特色 （３）教育課程編成の内容・特色 　③ 〔社会文化システムコース 　【考古人類学プログラム】〕 　ナスカ地上絵の世界的研究拠点として，アンデス文明の先進的研究を牽引する研究者，政府などの公的機関において国際協力を推進できる人材，および国内外の文化財保護事業を推進しその発展に貢献できる人材を育成する教育プログラムである。 29ページ ６　教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件 （２）履修指導 　２）履修モデル 　【履修モデル】社会文化システムコース・考古人類学プログラム

（新）【履修モデル】社会文化システムコース・考古人類学プログラム

【履修モデル】 社会文化システムコース･考古人類学プログラム

養成する人材像	ナスカ地上絵の世界的研究拠点として，政府などの公的機関において国際協力を推進できる人材，国内外の文化財保護事業を推進しその発展に貢献できる人材，考古人類学及びアンデス文明の先進的研究を牽引する研究者
想定する就職先等	文化財専門職員、博物館の学芸員、教員、研究機関の専門職員、文化財関連の民間企業（土木･測量･埋蔵文化財事業）、教育･学習支援業、情報通信業、国家公務員、地方公務員、博士課程進学

人文社会科学部
人間文化コース
文化人類学プログラム

文化人類学概論
文化人類学基礎演習
文化人類学特殊講義
文化人類学演習
アンデス考古学概論
アンデス考古学基礎演習
アンデス考古学特殊講義
アンデス考古学演習
環境動態概論
環境動態概論基礎演習
環境動態概論特殊講義
環境動態概論演習　等

山形大学人文社会科学部人間文化コース認知情報科学ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ
他大学で文化財・考古学、文化人類学を学んだ者
市町村の文化財保護課、博物館等に勤務する者
研究者を希望する留学生

科目区分 ＼ 年次			1年次 前期	1年次 後期	2年次 前期	2年次 後期	単位数	合計
修士論文			主指導教員及び副指導教員決定 → 研究計画書に基づく指導			学位論文審査		
専門知識と技術の深化	高度専門科目	特別研究	考古人類学特別研究Ⅰ	考古人類学特別研究Ⅰ	考古人類学特別研究Ⅱ	考古人類学特別研究Ⅱ	8	30
		専門科目	人類学･考古学特論A 人類学･考古学特論B 人間情報科学特論 心理学特別演習（統計）	人類学･考古学特別演習A 人類学･考古学特別演習B 心理科学特別演習A	考古人類学特別演習 ※履修プログラムから特論2単位、特別演習2単位を含むこと ※所属コースから12単位以上を含むこと		16	
		研究科共通科目	社会文化創造論Ⅰ	社会文化創造論Ⅱ			2	
知の総合的推進力の育成	基礎専門科目		異分野実践研修	異分野連携論			2	
高度な人間力の涵養	基盤教育科目		地域創生･次世代形成･多文化共生論				2	

全学共通科目　研究科共通科目　コース科目　プログラム科目　他コース科目　必修科目　選択必修科目

（旧）【履修モデル】社会文化システムコース・考古人類学プログラム

【履修モデル】 社会文化システムコース･考古人類学プログラム

養成する人材像	ナスカ地上絵の世界的研究拠点として，アンデス文明の先進的研究を牽引する研究者，政府などの公的機関において国際協力を推進できる人材や国内外の文化財保護事業を推進しその発展に貢献できる人材
想定する就職先等	文化財専門職員、博物館の学芸員、教員、研究機関の専門職員、文化財関連の民間企業（土木･測量･埋蔵文化財事業）、教育･学習支援業、情報通信業、国家公務員、地方公務員、博士課程進学

人文社会科学部
人間文化コース
文化人類学プログラム

文化人類学概論
文化人類学基礎演習
文化人類学特殊講義
文化人類学演習
アンデス考古学概論
アンデス考古学基礎演習
アンデス考古学特殊講義
アンデス考古学演習
環境動態概論
環境動態概論基礎演習
環境動態概論特殊講義
環境動態概論演習　等

山形大学人文社会科学部人間文化コース認知情報科学ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ
他大学で文化財・考古学、文化人類学を学んだ者
市町村の文化財保護課、博物館等に勤務する者
研究者を希望する留学生

科目区分 ＼ 年次			1年次 前期	1年次 後期	2年次 前期	2年次 後期	単位数	合計
修士論文			主指導教員及び副指導教員決定 → 研究計画書に基づく指導			学位論文審査		
専門知識と技術の深化	高度専門科目	特別研究	考古人類学特別研究Ⅰ	考古人類学特別研究Ⅰ	考古人類学特別研究Ⅱ	考古人類学特別研究Ⅱ	8	30
		専門科目	人類学･アンデス考古学特論A 人類学･アンデス考古学特論B 人間情報科学特論 心理学特別演習（統計）	人類学･アンデス考古学特別演習A 人類学･アンデス考古学特別演習B 心理科学特別演習A	考古人類学特別演習 ※履修プログラムから特論2単位、特別演習2単位を含むこと ※所属コースから12単位以上を含むこと		16	
		研究科共通科目	社会文化創造論Ⅰ	社会文化創造論Ⅱ			2	
知の総合的推進力の育成	基礎専門科目		異分野実践研修	異分野連携論			2	
高度な人間力の涵養	基盤教育科目		地域創生･次世代形成･多文化共生論				2	

全学共通科目　研究科共通科目　コース科目　プログラム科目　他コース科目　必修科目　選択必修科目

（新旧対照表）教員名簿

新	旧
3ページ 調書番号　24 　担当授業科目の名称： 　　［人類学・考古学特論Ａ］ 　　［人類学・考古学特論Ｂ］ 　　［人類学・考古学特論Ｃ］ 　　［人類学・考古学特論Ｄ］ 　　［人類学・考古学特別演習Ａ］ 　　［人類学・考古学特別演習Ｂ］ 　　［人類学・考古学特別演習Ｃ］ 　　［人類学・考古学特別演習Ｄ］	3ページ 調書番号　24 　担当授業科目の名称： 　　［人類学・アンデス考古学特論Ａ］ 　　［人類学・アンデス考古学特論Ｂ］ 　　［人類学・アンデス考古学特論Ｃ］ 　　［人類学・アンデス考古学特論Ｄ］ 　　［人類学・アンデス考古学特別演習Ａ］ 　　［人類学・アンデス考古学特別演習Ｂ］ 　　［人類学・アンデス考古学特別演習Ｃ］ 　　［人類学・アンデス考古学特別演習Ｄ］
6ページ 調書番号　60 　担当授業科目の名称： 　　［人類学・考古学特論Ａ］ 　　［人類学・考古学特論Ｂ］ 　　［人類学・考古学特論Ｃ］ 　　［人類学・考古学特論Ｄ］ 　　［人類学・考古学特別演習Ａ］ 　　［人類学・考古学特別演習Ｂ］ 　　［人類学・考古学特別演習Ｃ］ 　　［人類学・考古学特別演習Ｄ］	6ページ 調書番号　60 　担当授業科目の名称： 　　［人類学・アンデス考古学特論Ａ］ 　　［人類学・アンデス考古学特論Ｂ］ 　　［人類学・アンデス考古学特論Ｃ］ 　　［人類学・アンデス考古学特論Ｄ］ 　　［人類学・アンデス考古学特別演習Ａ］ 　　［人類学・アンデス考古学特別演習Ｂ］ 　　［人類学・アンデス考古学特別演習Ｃ］ 　　［人類学・アンデス考古学特別演習Ｄ］
7ページ 調書番号　71 　担当授業科目の名称： 　　［人類学・考古学特論Ａ］ 　　［人類学・考古学特論Ｂ］ 　　［人類学・考古学特論Ｃ］ 　　［人類学・考古学特論Ｄ］ 　　［人類学・考古学特別演習Ａ］ 　　［人類学・考古学特別演習Ｂ］ 　　［人類学・考古学特別演習Ｃ］ 　　［人類学・考古学特別演習Ｄ］	7ページ 調書番号　71 　担当授業科目の名称： 　　［人類学・アンデス考古学特論Ａ］ 　　［人類学・アンデス考古学特論Ｂ］ 　　［人類学・アンデス考古学特論Ｃ］ 　　［人類学・アンデス考古学特論Ｄ］ 　　［人類学・アンデス考古学特別演習Ａ］ 　　［人類学・アンデス考古学特別演習Ｂ］ 　　［人類学・アンデス考古学特別演習Ｃ］ 　　［人類学・アンデス考古学特別演習Ｄ］
7ページ 調書番号　78 　担当授業科目の名称： 　　［人類学・考古学特論Ａ］ 　　［人類学・考古学特論Ｂ］ 　　［人類学・考古学特論Ｃ］ 　　［人類学・考古学特論Ｄ］ 　　［人類学・考古学特別演習Ａ］ 　　［人類学・考古学特別演習Ｂ］ 　　［人類学・考古学特別演習Ｃ］ 　　［人類学・考古学特別演習Ｄ］	7ページ 調書番号　78 　担当授業科目の名称： 　　［人類学・アンデス考古学特論Ａ］ 　　［人類学・アンデス考古学特論Ｂ］ 　　［人類学・アンデス考古学特論Ｃ］ 　　［人類学・アンデス考古学特論Ｄ］ 　　［人類学・アンデス考古学特別演習Ａ］ 　　［人類学・アンデス考古学特別演習Ｂ］ 　　［人類学・アンデス考古学特別演習Ｃ］ 　　［人類学・アンデス考古学特別演習Ｄ］

（教育課程等に関する意見）社会文化創造研究科　社会文化創造専攻（M）

４．学際的な教育課程になっているが、修士課程修了後、実社会で高度専門職業人として活躍できるのか不明確である。例えば、企業経営を研究テーマとした場合の履修モデルが示されているが、企業経営に関する科目が僅かしなく、このカリキュラムで企業経営に関する専門的知識を備えた人材が育成できるのか不明確であるため、この点について妥当性を説明するか、必要に応じて修正すること。

（対応）

企業の経営には、会社設立、契約の締結と履行など経営法務の知識が不可欠であるため、設置の趣旨等を記載した書類では、経営法務に関する専門知識を高めたい学生のための履修モデルを提示した。

ご指摘を踏まえ、社会システムプログラムには、「企業経営論特論」、「経営情報特論」、「中小企業論特論」、「株式会社論特論」、「比較会計学特論」、「マーケティング論特論」といった科目も用意されており、財務、組織、製品開発など経営学・経済学の視点から企業経営に関する高度専門知識を身に付けることが可能であり、経営学・経済学の面を重視した履修モデルに修正する。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
31ページ ６　教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件 （２）履修指導 ２）履修モデル 【履修モデル】社会文化システムコース・社会システムプログラム	30ページ ６　教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件 （２）履修指導 ２）履修モデル 【履修モデル】社会文化システムコース・社会システムプログラム

（新）【履修モデル】社会文化システムコース・社会システムプログラム

【履修モデル】 社会文化システムコース･社会システムプログラム

養成する人材像	社会科学諸学問の深い研鑽と隣接する諸科学の幅広い兼修によって培った高い専門性と俯瞰的複合的視野を拠りどころに、課題先進県山形に おける地域創生や地域貢献を牽引し、地域における社会づくりに貢献できる人材
想定する就職先等	地域を基盤に広域展開を図る地場企業、地銀、地方自治体、労働組合、生協等協同組合やNPO、住民の意見をすくい上げる議員希望者

人文社会科学部 経済マネジメントコース

経営学ａ　経営学ｂ　ミクロ経済学Ⅰ
会計学Ⅰ　会計学２　会社法Ⅰ
中小企業論ａ　中小企業論ｂ　管理会計ａ
マーケティングａ　財務会計ａ　経営学演習　等

山形大学地域教育文化学部児童教育コース
他大学で法律学・政治学を学んだ者
役所・金融機関・ＮＰＯに勤務する者
商社・メーカーへの就職を希望する留学生

科目区分 ＼ 年次			1年次 前期	1年次 後期	2年次 前期	2年次 後期	単位数	合計
修士論文			主指導教員及び副指導教員決定 → 研究計画書に基づく指導			学位論文審査		
専門知識と技術の深化	高度専門科目	特別研究	企業システム特別研究Ⅰ	企業システム特別研究Ⅰ	企業システム特別研究Ⅱ	企業システム特別研究Ⅱ	8	30
		専門科目	中小企業論特論 企業経営論特論 グローバル経済史特論 生涯スポーツ特論	中小企業論特別演習 企業経営論特別演習	企業システム特別演習 商法特論 ※履修プログラムから特論2単位、特別演習2単位を含むこと ※所属コースから12単位以上を含むこと		16	
		研究科共通科目	社会文化創造論Ⅰ	社会文化創造論Ⅱ			2	
知の総合的推進力の育成	基礎専門科目		研究者としての基礎スキル キャリア･マネジメント				2	
高度な人間力の涵養	基盤教育科目		地域創生･次世代形成･多文化共生論				2	

全学共通科目　研究科共通科目　コース科目　プログラム科目　他コース科目　必修科目　選択必修科目

（旧）【履修モデル】社会文化システムコース・社会システムプログラム

【履修モデル】 社会文化システムコース･社会システムプログラム

養成する人材像	社会科学諸学問の深い研鑽と隣接する諸科学の幅広い兼修によって培った高い専門性と俯瞰的複合的視野を拠りどころに、課題先進県山形に おける地域創生や地域貢献を牽引し、地域における社会づくりに貢献できる人材
想定する就職先等	地域を基盤に広域展開を図る地場企業、地銀、地方自治体、労働組合、生協等協同組合やNPO、住民の意見をすくい上げる議員希望者

人文社会科学部 経済マネジメントコース

憲法Ⅰ　憲法２　行政法Ⅰ
刑事法基礎Ⅰ　民法基礎（契約法）　会社法Ⅰ
国際法Ⅰ　民法基礎（物権）　労働法Ⅰ
法哲学Ⅰ　民法展開（債権総論）　民法演習Ⅰ　等

山形大学地域教育文化学部児童教育コース
他大学で法律学・政治学を学んだ者
役所・金融機関・ＮＰＯに勤務する者
商社・メーカーへの就職を希望する留学生

科目区分 ＼ 年次			1年次 前期	1年次 後期	2年次 前期	2年次 後期	単位数	合計
修士論文			主指導教員及び副指導教員決定 → 研究計画書に基づく指導			学位論文審査		
専門知識と技術の深化	高度専門科目	特別研究	企業システム特別研究Ⅰ	企業システム特別研究Ⅰ	企業システム特別研究Ⅱ	企業システム特別研究Ⅱ	8	30
		専門科目	民法特論Ｂ 商法特論 グローバル経済史特論 生涯スポーツ特論	民法特別演習Ｂ 商法特別演習	企業システム特別演習 企業経営論特論 ※履修プログラムから特論2単位、特別演習2単位を含むこと ※所属コースから12単位以上を含むこと		16	
		研究科共通科目	社会文化創造論Ⅰ	社会文化創造論Ⅱ			2	
知の総合的推進力の育成	基礎専門科目		研究者としての基礎スキル キャリア･マネジメント				2	
高度な人間力の涵養	基盤教育科目		地域創生･次世代形成･多文化共生論				2	

全学共通科目　研究科共通科目　コース科目　プログラム科目　他コース科目　必修科目　選択必修科目

（教育課程等に関する意見）社会文化創造研究科　社会文化創造専攻（M）

５．「複数・異分野連携指導体制」について、計画書の内容だけでは実効性が十分か不明確であるため、運用面の工夫も含めて具体的に説明すること。

（対応）

学生の研究指導は、学生の研究テーマに最も相応しい研究教育分野に属する教員を主指導教員、副指導教員２名のうち１名を主指導教員と同じかまたは専門的関連性の強い研究教育分野の教員、もう１名は他コースの研究分野の教員を充てて行う。主指導教員は、学生の修学面の指導のほか、生活面についてもアドバイス等を行い、学生が研究活動を遂行することに対して主体的な責任を果たす。副指導教員は、主指導教員と連携し、修学面、生活面において主指導教員の指導を支援する。主指導教員と副指導教員については、社会文化創造研究科への入学時に、当該学生の問題意識や研究計画に基づき、学生本人と協議をして決定する。そして、４月の研究科運営会議を経て、研究科委員会において正式に決定する。社会文化創造研究科は、文化、社会、心理学、芸術・スポーツなど研究教育分野が広範に及んでおり、主・副指導教員が連携し、学生の研究内容に応じて対応することを、説明として追加する。

社会文化システムコースの社会システムプログラムにおいて、中小企業の経営を研究テーマにする場合の指導教員の選出例を示す。社会システムプログラムにおける企業システム（研究指導分野）の中小企業論担当教員が主指導教員になり、副指導教員の１名は企業システムの企業経営論担当教員がつとめる。副指導教員のもう１名は、芸術・スポーツ科学コースの生涯スポーツ論担当教員がつとめ、スポーツ活動を社会や市場のシステムの中で持続的に発展させる学際的視点から学生の修学指導を支援する。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
28ページ ６　教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件 （２）履修指導 １）履修指導体制 社会文化創造研究科では，軸足性と学際性を踏まえた研究指導を担保するため，3名の教員（主指導教員1名，副指導教員2名）による指導体制をとる。副指導教員のうち少なくとも1名は他コースの研究分野の教員とし，分野横断的な研究指導を行えるようにする。 具体的には、学生の研究テーマに最も相応しい研究教育分野に属する教員が主指導教員になる。副指導教員２名のうち１名は，指導の専門性を担保するため，主指導教員と同じ，または専門的関連性の強い研究教育分野の教員を充て	27ページ ６　教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件 （２）履修指導 １）履修指導体制 社会文化創造研究科では，軸足性と学際性を踏まえた研究指導を担保するため，3名の教員（主指導教員1名，副指導教員2名）による指導体制をとる。副指導教員のうち少なくとも1名は他コースの研究分野の教員とし，分野横断的な研究指導を行えるようにする。

る。副指導教員のもう１名は，学際的な指導を担保するため，他コースの研究分野の教員とする。社会文化創造研究科は，文化，社会，心理学，芸術・スポーツなど研究教育分野が広範に及んでいるので，他コースの副指導教員の選定にあたっては，学生の問題意識や研究内容を考慮し，学生とも相談しながら決定する。主・副指導教員が連携し，学生の研究内容に応じて，学際性が確保できるような履修計画を作成する。 指導教員は履修指導・研究指導面だけでなく生活・精神面などの相談など，多岐にわたる修学支援を行う。 指導教員については，学生の研究テーマを考慮のうえ，入学後のガイダンスなどにおいて研究テーマの近い教員と学生が協議して決定し，研究科委員会で最終決定する。	指導教員は履修指導・研究指導面だけでなく生活・精神面などの相談など，多岐にわたる修学支援を行う。 指導教員については，学生の研究テーマを考慮のうえ，入学後のガイダンスなどにおいて研究テーマの近い教員と学生が協議して決定し，研究科委員会で最終決定する。
36ページ （３）研究指導 １）研究指導体制 本研究科においては，研究指導については，3名の教員（主指導教員１名，副指導教員２名）による指導体制をとる。副指導教員のうち少なくとも１名は他コースの研究分野の教員とし，分野連携によって複数の指導教員で指導にあたる制度を取り入れている。 具体的には、学生の研究テーマに最も相応しい研究教育分野に属する教員が主指導教員になる。副指導教員２名のうち１名は，指導の専門性を担保するため，主指導教員と同じ，または専門的関連性の強い研究教育分野の教員を充てる。副指導教員のもう１名は，学際的な指導を担保するため，他コースの研究分野の教員とする。社会文化創造研究科は，文化，社会，心理学，芸術・スポーツなど研究教育分野が広範に及んでいるので，他コースの副指導教員の選定にあたっては，学生の問題意識や研究内容を考慮し，学生とも相談しながら決定する。主・副指導教員が連携し，学生の研究内容に応じて，学際性が確保できるような履修計画を作成する。 指導教員は，履修指導・研究指導面だけでなく生活・精神面などの相談など，多岐にわたる修学支援を行い，学生が効果的に研究を進められる環境を整える。	35ページ （３）研究指導 １）研究指導体制 本研究科においては，研究指導については，3名の教員（主指導教員１名，副指導教員２名）による指導体制をとる。副指導教員のうち少なくとも１名は他コースの研究分野の教員とし，分野連携によって複数の指導教員で指導にあたる制度を取り入れている。 指導教員は，履修指導・研究指導面だけでなく生活・精神面などの相談など，多岐にわたる修学支援を行い，学生が効果的に研究を進められる環境を整える。

（教育課程等に関する意見）社会文化創造研究科　社会文化創造専攻（M）

６．学士課程との接続及び人材養成像を踏まえると、デザイン関連科目を設定することが望ましいと考えられるため、対応方針について再考すること。

（対応）

ご指摘を踏まえ、現在、地域教育文化研究科においてデザイン関連科目を担当している兼任教員（非常勤講師）がデザイン関連科目（「デザイン方法特論」「デザイン表現特別演習」）を開講する。

（新旧対照表）基本計画書

新	旧
2ページ 教育課程 　開設する授業科目の総数 　　講義127科目、演習145科目、 　　実験・実習15科目、計287科目 教員組織の概要 　新設分 　　社会文化創造研究科 　　社会文化創造専攻（修士課程） 　　兼任教員等　53（51）	2ページ 教育課程 　開設する授業科目の総数 　　講義125科目、演習143科目、 　　実験・実習15科目、計283科目 教員組織の概要 　新設分 　　社会文化創造研究科 　　社会文化創造専攻（修士課程） 　　兼任教員等　52（50）

（新旧対照表）教育課程等の概要

新	旧
6ページ 科目区分 　高度専門科目 　　芸術・スポーツ科学コース 　　造形芸術プログラム 　　［デザイン方法特論］ 　　配当年次：1前 　　単位数：2 　　授業形態：講義 　　専任教員等の配置：兼1 　　［デザイン表現特別演習］ 　　配当年次：1後 　　単位数：2 　　授業形態：演習 　　専任教員等の配置：兼1 　　小計（16科目）　単位数 35単位（選択） 合計（287科目） 　単位数 602単位（選択） 　備考：兼任53	6ページ 科目区分 　高度専門科目 　　芸術・スポーツ科学コース 　　造形芸術プログラム 　　小計（14科目）　単位数 31単位（選択） 合計（283科目） 　単位数 594単位（選択） 備考：兼任52

（新旧対照表）授業科目の概要

新	旧
53ページ ［デザイン方法特論］ 　デザイン史を特にデザイン方法論の視点から考察し、現代の日本におけるデザイン行為の在り方について論じる。デザインと周辺隣接分野、特に美術、工芸、建築、工業、科学技術等との関係とその変化について検証し、その時代背景や社会や文化から与えられた影響についても考察する。また20世紀末より登場する情報技術を基盤とするデザイン分野、特にwebデザイン、インタラクションデザイン、インターフェイスデザイン、情報デザイン、リレーショナルデザイン等の方法論を概観し、インターネットコンテンツ、CGI、アニメーション、ゲーム、ワークショップ、VR等におけるデザイン実務がどのように行われてきたのかを検証する。 54ページ ［デザイン表現特別演習］ 　20世紀末より登場する情報技術を基盤とするデザイン分野、特にインターネットコンテンツやメディア芸術作品等の制作を通して、デザイン理論やデザイン方法論の理解を深めるとともに、デザイン実務の実際を体験する。またそれらの作品の公開、メディアの運営、プラットフォームの構築なども実践し、デザイン行為と社会、文化との関係やその影響を検証し、考察する。メディアの転換期とも呼ばれる21世紀初老からのデザイン環境におけるデザインの在り方とその意義について知見を深める。	

（新旧対照表）教員名簿〔教員の氏名等〕

新	旧
11ページ 調書番号　152 　専任等区分：兼任 　職位：講師 　　ニシノ　タケシ 　氏名：西野　毅史 　　＜令和３年４月＞ 　年齢：45 　保有学位等：修士（社会福祉学） 　月額基本給（千円）：28 　担当授業科目の名称：デザイン方法特論 　配当年次：1前 　担当単位数：2 　年間開講数：1 　担当授業科目の名称：デザイン表現特別演習 　配当年次：1後 　担当単位数：2 　年間開講数：1 　現職（就任年月日）：山形大学大学院 　　非常勤講師（平30.4）	

（教育課程等に関する意見）社会文化創造研究科　社会文化創造専攻（M）

７．造形芸術プログラムの教育課程において、日本彫刻史や工芸史など、重要分野の基礎知識を提供する科目が含まれていないように思われるが、このような教育課程としている理由及び妥当性について、養成する人材像やディプロマポリシーと関連付けて具体的に説明するとともに、必要に応じてカリキュラムを修正すること。

（対応）

造形芸術プログラムの教育課程は、ディプロマポリシーにある、芸術に関する高度で専門的な研究を遂行することができる深い知識と高度な技能、現代社会の課題解決のために活用する能力を学修するため、平面表現、立体表現、美術史、美術教育という根幹的な基礎知識科目と、文化コーディネート実習、地域社会文化実習、アートマネジメント等、課題解決力の育成をねらいとする発展的内容の実習や演習を配置している。

ご指摘を踏まえ、、西洋美術史に比べて日本の美術史に関する内容が少なかったことから、日本彫刻史に関する内容を立体造形特別演習で扱うよう授業科目の概要を修正する。

さらに、６の指摘を踏まえてデザイン分野の基礎知識を提供するために追加した２科目（「デザイン方法特論」「デザイン表現特別演習」）の中で工芸史も扱う。

（新旧対照表）授業科目の概要

新	旧
54ページ ［立体造形特別演習］ 立体造形の中で今後彫刻がどのようにあるべきかを、日本における彫刻と工芸という立体造形物の歴史を考察して検証する。現代の日本においてどのような立体作品が望ましく、地域社会に求められているのか、日本における彫刻とはどのようなものであるのか、どうあるべきなのかを、彫刻という立体芸術の日本における歴史を概観し、明治時代以降の西洋彫刻の影響を受けた彫刻作品と江戸時代以前の工芸品である立体造形作品とを比較・検証し考察する。その考察をもとに作品を構想し、実際に彫刻作品として制作して検証する。	53ページ ［立体造形特別演習］ 立体造形の中で今後彫刻がどのようにあるべきかを、日本における彫刻の歴史を考察して検証する。現代の日本においてどのような立体作品が望ましく、地域社会に求められているのか、日本における彫刻とはどのようなものであるのか、どうあるべきなのかを、彫刻という立体芸術の日本における歴史を概観し、明治時代以降の西洋彫刻の影響を受けた彫刻作品と江戸時代以前の立体造形作品とを比較・検証し考察する。その考察をもとに作品を構想し、実際に彫刻作品として制作して検証する。

（教育課程等に関する意見）社会文化創造研究科　社会文化創造専攻（M）

８．「地域的な展開を新たに創造・実践 できる人材を養成する」という研究科の趣旨に照らすと、教育課程には、よりローカルな民俗文化や伝統芸能との関わりに関する内容を含めることが望ましいため、対応方針を再考すること。

（対応）

ご指摘を踏まえ、地域の民族文化や伝統芸能との関わりに関する内容を、研究科共通科目「社会文化創造論Ⅰ」および造形芸術プログラムの専門科目「伝統文化特論」に加え、授業科目の概要を修正する。

社会文化創造研究科では、地域的な展開を新たに創造・実現できる人材の育成を研究科全体の目標としている。このことから、研究科共通科目である「社会文化創造論Ⅰ」において、地域の民族文化や伝統文化について扱い、院生全員が学修する機会を保障する。さらに履修指導において、造形芸術プログラムの専門科目「伝統文化特論」の履修を推奨する。

（新旧対照表）授業科目の概要

新	旧
4ページ ［社会文化創造論Ⅰ］ 「文化」を「社会」との関連の中で俯瞰的に捉える視点を学び、地域の伝統芸能・民俗文化が地域社会を形成・維持する上で果たした役割を理解し、現代社会が直面する課題についての分析スキルを身につけ、課題が生じる原因を的確に把握して社会の変革に対応する力を修得する。 本講義は、学生が「文化」と「社会」に関わる貢献や学術研究をみずから構想するにあたり、社会文化創造研究科における教育・研究に即した特徴的なアプローチがどのようなものであるかについて、学術的な共通基盤を地域の伝統芸能や民俗文化の形成・発展に着目することによって身につけることを目的とするものである。 全8回 (18　大喜直彦/3回) オリエンテーションおよび地域間ネットワークについての講義を行う。 (23　三上英司/4回) オリエンテーション、多文化の構造についての講義および共生とグローバリズムをテーマとした総括的な講義を行う。 (24　坂井正人/2回) オリエンテーションおよび共生とグローバリズムをテーマとした総括的な講義を行う。 (26　加藤健司/3回) オリエンテーションおよび文化の動態についての	4ページ ［社会文化創造論Ⅰ］ 「文化」を「社会」との関連の中で俯瞰的に捉える視点を学び、現代社会が直面する課題についての分析スキルを身につけ、課題が生じる原因を的確に理解して社会の変革に対応する力を修得する。 本講義は、学生が「文化」と「社会」に関わる貢献や学術研究をみずから構想するにあたり、社会文化創造研究科における教育・研究に即した特徴的なアプローチがどのようなものであるかについて、学術的な共通基盤を身につけることを目的とするものである。 全8回 (18　大喜直彦/3回) オリエンテーションおよび地域間ネットワークについての講義を行う。 (23　三上英司/4回) オリエンテーション、多文化の構造についての講義および共生とグローバリズムをテーマとした総括的な講義を行う。 (24　坂井正人/2回) オリエンテーションおよび共生とグローバリズムをテーマとした総括的な講義を行う。 (26　加藤健司/3回) オリエンテーションおよび文化の動態についての

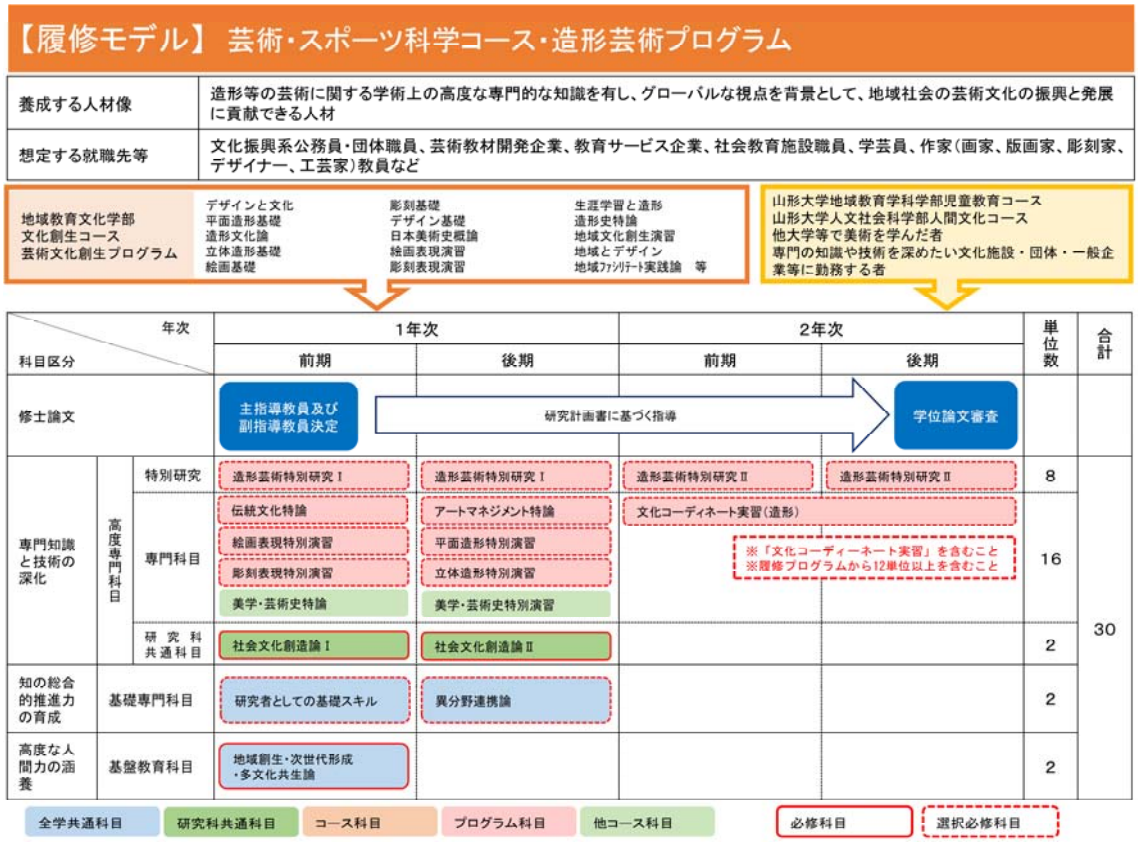
講義を行う。 53ページ ［伝統文化特論］ 　本講義では、山形に伝来する絵馬をテーマに、日本および地域の伝統文化について学ぶ。その成果を大学附属博物館で展示することで伝統文化の現代における活用について考える力を身につける。具体的には、今も身近な存在である絵馬が生まれた歴史的背景や、絵馬から読み取れる当時の社会状況などの基礎知識を講義で学ぶ。その後、大学附属博物館等が収蔵する資料を用いて絵馬の取り扱いと調査方法を習得する。それから実際に山形市内に所在する絵馬を調査することで、地域文化を考察する手法を身につける。そのうえで附属博物館における展示を企画し、さらに理解を深める。一連の学習を通して伝統文化に対する幅広い洞察力と自己の表現能力を効果的かつ段階的に養うものとする。	講義を行う。 52ページ ［伝統文化特論］ 　本講義では、中国および日本において培われてきた書画の伝統について学び、その現代的受容の在り方について理解を深めることを目的とする。具体的には、附属博物館等が収蔵する書画と現代アート（自らの作品）とを組み合わせ、新旧それぞれの作品の新たな見方を提案することによって、伝統文化に対する幅広い洞察力と自己の表現能力を効果的かつ段階的に養うものとする。最終的には附属博物館において展示を実施するため、伝統的な書画の取り扱い、観察方法などの基礎知識の習得および伝統文化の特質を伝える様々な手法について実践的に学ぶ。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
24ページ ４　教育課程の編成の考え方及び特色 （４）山形県の総合発展計画と教育課程との関係 　山形県は県づくりを進めるための新たな指針として，令和２年３月に第４次山形県総合発展計画を策定した。その基本目標は「人と自然がいきいきと調和し，真の豊かさと幸せを実感できる山形」である。基本目標の考え方は，真の豊かさ，生きがい・幸せを実感できることに基づいている。また，山形県は社会経済環境の変化の一つとして人口減少の加速を挙げている。山形県民が豊かさ，生きがい・幸せを実感できること，言い換えればよりよい生き方ができることが人口減少問題の解決に要請される。豊かさ，生きがい・幸せの根底にあるのが社会と文化であり，社会と文化の視点から地域課題の本質や解決策を学術的に探求していくことが，よりよい生き方の実現に不可欠である。山形県は人生100年時代の到来や価値観・暮らし方の多様化も社会経済環境の変化であると認識しているが，これらの変化も社会や文化と密接に関連している。社会と文化は社会文化創造研究科の高度専門教育の核となるものである。社会文化創造研究科では，人間社会を社会と文化の関係から捉え直し，地域的な展開を新たに創造・実践できる人材を育成すること目標としている。この目標の実現のために，分野横断的な教育による学際性の充実，共通科目や推奨科目による地域性の充実，教育プログラムによる専門性の充実，文化コーディネート実習による実践性の強化などを教育課程に取り入れている。国際ドキュメンタリー映画祭，山形交響楽団など地域の文化資	24ページ ４　教育課程の編成の考え方及び特色 （４）山形県の総合発展計画と教育課程との関係 　山形県は県づくりを進めるための新たな指針として，令和２年３月に第４次山形県総合発展計画を策定した。その基本目標は「人と自然がいきいきと調和し，真の豊かさと幸せを実感できる山形」である。基本目標の考え方は，真の豊かさ，生きがい・幸せを実感できることに基づいている。また，山形県は社会経済環境の変化の一つとして人口減少の加速を挙げている。山形県民が豊かさ，生きがい・幸せを実感できること，言い換えればよりよい生き方ができることが人口減少問題の解決に要請される。豊かさ，生きがい・幸せの根底にあるのが社会と文化であり，社会と文化の視点から地域課題の本質や解決策を学術的に探求していくことが，よりよい生き方の実現に不可欠である。山形県は人生100年時代の到来や価値観・暮らし方の多様化も社会経済環境の変化であると認識しているが，これらの変化も社会や文化と密接に関連している。社会と文化は社会文化創造研究科の高度専門教育の核となるものである。社会文化創造研究科では，人間社会を社会と文化の関係から捉え直し，地域的な展開を新たに創造・実践できる人材を育成すること目標としている。この目標の実現のために，分野横断的な教育による学際性の充実，教育プログラムによる専門性の充実，文化コーディネート実習による実践性の強化などを教育課程に取り入れている。国際ドキュメンタリー映画祭，山形交響楽団など地域の文化資源を活用した取り組みも行っている。

源を活用した取り組みも行っている。 このように，社会文化創造研究科の教育課程は，山形県民がよりよい生き方を実現できる社会を創る人材の育成に貢献するものであり，山形県第4次総合発展計画の基本目標に合致している。 35ページ ６　教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件 （２）履修指導 ２）履修モデル 【履修モデル】芸術・スポーツ科学コース・造形芸術プログラム	このように，社会文化創造研究科の教育課程は，山形県民がよりよい生き方を実現できる社会を創る人材の育成に貢献するものであり，山形県第4次総合発展計画の基本目標に合致している。 34ページ ６　教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件 （２）履修指導 ２）履修モデル 【履修モデル】芸術・スポーツ科学コース・造形芸術プログラム

(新)【履修モデル】芸術・スポーツ科学コース・造形芸術プログラム



（旧）【履修モデル】芸術・スポーツ科学コース・造形芸術プログラム

【履修モデル】 芸術･スポーツ科学コース･造形芸術プログラム

養成する人材像	造形等の芸術に関する学術上の高度な専門的な知識を有し、グローバルな視点を背景として、地域社会の芸術文化の振興と発展に貢献できる人材
想定する就職先等	文化振興系公務員･団体職員、芸術教材開発企業、教育サービス企業、社会教育施設職員、学芸員、作家（画家、版画家、彫刻家、デザイナー、工芸家）教員など

地域教育文化学部
文化創生コース
芸術文化創生プログラム

デザインと文化
平面造形基礎
造形文化論
立体造形基礎
絵画基礎
彫刻基礎
デザイン基礎
日本美術史概論
絵画表現演習
彫刻表現演習
生涯学習と造形
造形史特論
地域文化創生演習
地域とデザイン
地域ﾌｧｼﾘﾃｰﾄ実践論　等

山形大学地域教育学科学部児童教育コース
山形大学人文社会科学部人間文化コース
他大学等で美術を学んだ者
専門の知識や技術を深めたい文化施設・団体・一般企業等に勤務する者

科目区分 ＼ 年次			1年次 前期	1年次 後期	2年次 前期	2年次 後期	単位数	合計
修士論文			主指導教員及び副指導教員決定 →	研究計画書に基づく指導		→ 学位論文審査		
専門知識と技術の深化	高度専門科目	特別研究	造形芸術特別研究Ⅰ	造形芸術特別研究Ⅰ	造形芸術特別研究Ⅱ	造形芸術特別研究Ⅱ	8	30
		専門科目	絵画表現特別演習 彫刻表現特別演習 美学･芸術史特論	アートマネジメント特論 平面造形特別演習 立体造形特別演習 美学･芸術史特別演習	文化コーディネート実習（造形） ※「文化コーディーネート実習」を含むこと ※履修プログラムから12単位以上を含むこと		16	
		研究科共通科目	社会文化創造論Ⅰ	社会文化創造論Ⅱ			2	
知の総合的推進力の育成	基礎専門科目		研究者としての基礎スキル	異文化連携論			2	
高度な人間力の涵養	基盤教育科目		地域創生･次世代形成・多文化共生論				2	

全学共通科目　研究科共通科目　コース科目　プログラム科目　他コース科目　必修科目　選択必修科目

（教育課程等に関する意見）社会文化創造研究科　社会文化創造専攻（M）

９．スポーツ科学プログラムの履修モデルについて、養成する人物像・想定する就職先からすれば、「生涯スポーツ特論」は高度専門科目の主要科目の一つになると考えられ、履修モデルの中に含まれるべきと考えられるため、本履修モデルの妥当性を説明するか、必要に応じて適切に修正すること。

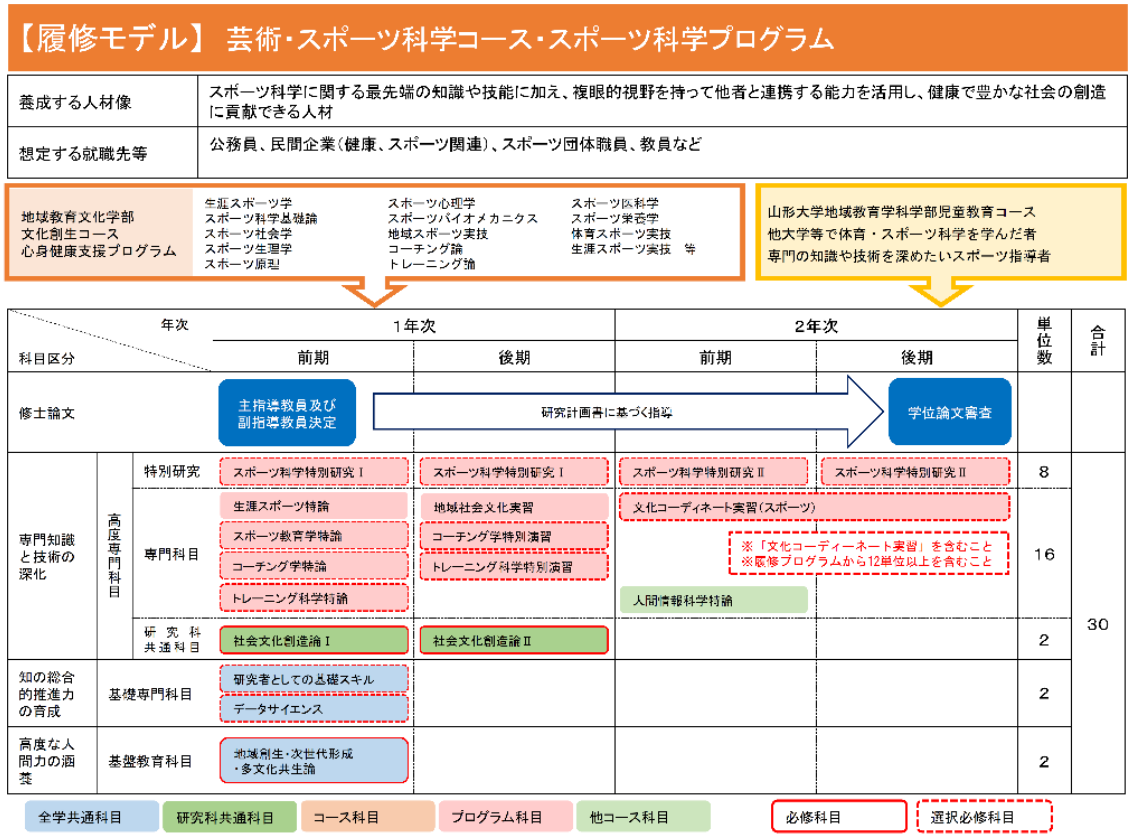
（対応）

ご指摘を踏まえ、「生涯スポーツ特論」がスポーツ科学プログラムの主要科目の一つになると考えられるため、履修モデルに含めるとともに科目順を見直し、履修モデルを修正する。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
33ページ ６　教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件 （２）履修指導 ２）履修モデル 【履修モデル】芸術・スポーツ科学コース・スポーツ科学プログラム	32ページ ６　教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件 （２）履修指導 ２）履修モデル 【履修モデル】芸術・スポーツ科学コース・スポーツ科学プログラム

（新）【履修モデル】芸術・スポーツ科学コース・スポーツ科学プログラム



（旧）【履修モデル】芸術・スポーツ科学コース・スポーツ科学プログラム

【履修モデル】 芸術・スポーツ科学コース・スポーツ科学プログラム

養成する人材像	スポーツ科学に関する最先端の知識や技能に加え、複眼的視野を持って他者と連携する能力を活用し、健康で豊かな社会の創造に貢献できる人材
想定する就職先等	公務員、民間企業（健康、スポーツ関連）、スポーツ団体職員、教員など

地域教育文化学部 文化創生コース 心身健康支援プログラム	生涯スポーツ学 スポーツ科学基礎論 スポーツ社会学 スポーツ生理学 スポーツ原理 スポーツ心理学 スポーツバイオメカニクス 地域スポーツ実技 コーチング論 トレーニング論 スポーツ医科学 スポーツ栄養学 体育スポーツ実技 生涯スポーツ実技　等
山形大学地域教育学科学部児童教育コース 他大学等で体育・スポーツ科学を学んだ者 専門の知識や技術を深めたいスポーツ指導者	

科目区分 ＼ 年次			1年次 前期	1年次 後期	2年次 前期	2年次 後期	単位数	合計
修士論文			主指導教員及び副指導教員決定 → 研究計画書に基づく指導			学位論文審査		
専門知識と技術の深化	高度専門科目	特別研究	スポーツ科学特別研究Ⅰ	スポーツ科学特別研究Ⅰ	スポーツ科学特別研究Ⅱ	スポーツ科学特別研究Ⅱ	8	30
		専門科目	スポーツ教育学特論 コーチング学特論 トレーニング科学特論 パフォーマンス解析特論	コーチング学特別演習 トレーニング科学特別演習 地域社会文化実習	文化コーディネート実習（スポーツ） ※「文化コーディーネート実習」を含むこと ※履修プログラムから12単位以上を含むこと 人間情報科学特論		16	
		研究科共通科目	社会文化創造論Ⅰ	社会文化創造論Ⅱ			2	
知の総合的推進力の育成	基礎専門科目		研究者としての基礎スキル データサイエンス				2	
高度な人間力の涵養	基盤教育科目		地域創生・次世代形成・多文化共生論				2	

全学共通科目　研究科共通科目　コース科目　プログラム科目　他コース科目　必修科目　選択必修科目

（教育課程等に関する意見）社会文化創造研究科　社会文化創造専攻（M）

10. 「スポーツ科学特別研究Ⅰ」及び「スポーツ科学特別研究Ⅱ」では、スポーツ心理学の研究指導が行われるものと見受けられるが、そのための基礎となる科目が不足していると考えられるため、本コースの科目配置の妥当性を説明し、必要に応じて適切に修正すること。

（対応）

ご指摘を踏まえ、「スポーツ科学特別研究Ⅰ」及び「スポーツ科学特別研究Ⅱ」におけるスポーツ心理学の研究指導のための基礎科目として、「スポーツ心理学特論」と「スポーツ心理学特別演習」を開講する。

（新旧対照表）基本計画書

新	旧
2ページ 教育課程 　開設する授業科目の総数 　　講義127科目、演習145科目、 　　実験・実習15科目、計287科目	2ページ 教育課程 　開設する授業科目の総数 　　講義125科目、演習143科目、 　　実験・実習15科目、計283科目

（新旧対照表）教育課程等の概要

新	旧
5ページ 科目区分 　高度専門科目 　　芸術・スポーツ科学コース 　　スポーツ科学プログラム 　　［スポーツ心理学特論］ 　　配当年次：1前 　　単位数：2 　　授業形態：講義 　　専任教員等の配置：准教授 　　［スポーツ心理学特別演習］ 　　配当年次：1後 　　単位数：2 　　授業形態：演習 　　専任教員等の配置：准教授 　　小計（24科目）　単位数 51単位（選択） 合計（287科目） 　単位数 602単位（選択）	5ページ 科目区分 　高度専門科目 　　芸術・スポーツ科学コース 　　スポーツ科学プログラム 　　小計（22科目）単位数 47単位（選択） 合計（283科目） 　単位数 594単位（選択）

（新旧対照表）授業科目の概要

新	旧
46ページ ［スポーツ心理学特論］ 　本授業は，スポーツ心理学を専門とする教員によって単独で実施する。授業の到達目標については，「スポーツ心理学に関する専門的知識の修得」と「スポーツ心理学における実践的方法論や対処法の理解」，「文献・情報収集能力の涵養」である。実際の授業は，スポーツ心理学において重要な概念や理論・モデル，メンタルトレーニングやメンタルサポート，チームビルディング等の実際について，教員から概説を行う「講義」を主とする。また，授業をとおして得られた知識を社会にどのように還元させられるかについて考察させたり，グループワークやプレゼンテーション等の「演習」を含んだ授業を展開することとする。さらには，授業内容に関連する文献・情報を収集し，授業内容に対する理解を深める態度を養うことで，スポーツ心理学の研究者としての基礎的な力を身につけさせることを企図して実施するものである。 47ページ ［スポーツ心理学特別演習］ 　本授業は，スポーツ心理学を専門とする教員によって単独で実施する．授業の到達目標については，「スポーツ心理学に関する文献の輪講により，高度な知識の理解と論理的思考能力や論理的表現力の修得」，「文献・情報収集能力や文章読解力の涵養」，「スポーツ心理学における研究者としての基礎的知識の理解」である。実際の授業は，スポーツ心理学に関する基礎的な知識（統計学的内容も含む）を教員から概説する「講義」を行う。続けて，スポーツ心理学に関する基礎的文献及び専門的文献を「輪講」し，教員と学生を交えたメンバーで議論して，文献内容の理解を深めることとする。同時に，スポーツ心理学における今日的な重要課題について解決する方法を探求し，専門知識や方法を的確に表現する力を身につけさせることを企図して実施するものである。	

（新旧対照表）教員名簿〔教員の氏名等〕

新	旧
8ページ 調書番号　91 　担当授業科目の名称：スポーツ心理学特論 　配当年次：1前 　担当単位数：2 　年間開講数：1 　担当授業科目の名称：スポーツ心理学特別演習 　配当年次：1後 　担当単位数：2 　年間開講数：1	8ページ 調書番号　91

（教育課程等に関する意見）社会文化創造研究科　社会文化創造専攻（M）

11．芸術・スポーツ科学コースにおいて「健康で豊かな社会の創造…」という表現が散見されるが、健康とスポーツ科学がどのように関わるのか、具体的に説明すること。

（対応）

スポーツを通して体を動かすことは、栄養，休養と共に，健康の保持増進に欠かせない３つの要素の１つである。スポーツ科学に関する高度な専門的知識・技能を身に付けることで、スポーツにおける様々な志向（生涯スポーツ、競技スポーツ、健康増進など）や対象（子どもから高齢者、アスリートなど）に幅広く応じることが可能となり、科学的根拠に基づいて適切に支援することができる。科学的根拠に基づいた効果的で安全性の高い支援を提供することで，人々が自らスポーツをより積極的に楽しみ、健康で豊かな社会の創造に貢献する。

ご指摘をふまえ、「スポーツ科学プログラム」の説明に、健康とスポーツ科学の関係について加筆する。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
12ページ １　設置の趣旨及び必要性 （１０）人材育成像 〈芸術・スポーツ科学コース〉 従来の学問領域の垣根を低くし，人間の活動を「社会」と「文化」の関係から多面的に考究し，スポーツや芸術を通して，健康で豊かな社会の創造や，地域及び世界における文化の発展に貢献できる人材を育成する。 24ページ ４　教育課程の編成の考え方及び特色 （３）教育課程編成の内容・特色 〔芸術・スポーツ科学コース【スポーツ科学プログラム】〕 スポーツ科学に関する最先端の知識や技能をもとに，子どもから高齢者，また健康増進から競技成績向上など，様々な対象や志向に対する科学的根拠に基づいた適切な支援を通して，健康で豊かな社会の創造に貢献できる人材を養成する教育プログラムである。	12ページ １　設置の趣旨及び必要性 （１０）人材育成像 〈芸術・スポーツ科学コース〉 従来の学問領域の垣根を低くし，人間の活動を「社会」と「文化」の関係から多面的に考究し，健康で豊かな社会の創造や，地域及び世界における文化の発展に貢献できる人材を育成する。 23ページ ４　教育課程の編成の考え方及び特色 （３）教育課程編成の内容・特色 〔芸術・スポーツ科学コース【スポーツ科学プログラム】〕 スポーツ科学に関する最先端の知識や技能に加え，複眼的視野を持って他者と連携する能力を活用し，健康で豊かな社会の創造に貢献できる人材を養成する教育プログラムである。

（その他に関する意見）社会文化創造研究科　社会文化創造専攻（M）

12. 本研究科では、指導教員が「履修指導・研究指導面だけでなく生活・精神面などの相談など、多岐にわたる修学支援を行う」とされているが、必ずしもメンタルヘルスを専門としない指導教員に「精神面」の相談にも対応させるためには、何らかの研修システムなど、制度運用上の配慮が求められるため、その点についての対応を具体的に説明すること。

（対応）

ご指摘を踏まえ、社会文化創造研究科が所在する小白川キャンパスの相談体制、教員の研修について、設置の趣旨等を記載した書類に具体的な説明を加筆する。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
28ページ ６　教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件 （２）履修指導 １）履修指導体制 社会文化創造研究科では，軸足性と学際性を踏まえた研究指導を担保するため，3 名の教員（主指導教員 1 名，副指導教員 2 名）による指導体制をとる。副指導教員のうち少なくとも 1 名は他コースの研究分野の教員とし，分野横断的な研究指導を行えるようにする。指導教員は履修指導・研究指導面だけでなく生活・精神面などの相談など，多岐にわたる修学支援を行う。指導教員については，学生の研究テーマを考慮のうえ，入学後のガイダンスなどにおいて研究テーマの近い教員と学生が協議して決定し，研究科委員会で最終決定する。指導教員は必ずしもメンタルヘルスを専門とはしていないが，小白川キャンパスには，医師，看護師，臨床心理士が勤務し，学生や職員の健康支援を行っている保健管理センターがあり，指導教員が対応に困ったときなどは相談できる体制が整っている。また，山形大学には医学部附属病院があり，精神科医師から助言を受けることができる。 社会文化創造研究科では分野横断的な指導を実施するため，様々な分野の教員が学生指導に携わることになるが，小白川キャンパスでは，キャンパスとして組織の枠にとらわれずに研修会が実施されているため，分野にとらわれずに問題意識を高めることが可能になる利点がある。現在の研修システムを活かし，これまでの事例や対応策を参考にしながら，教員の研修に努めていく。 また，指導教員が学生から精神面での相談を受けた場合，或いは，教員が指導学生の精神面	27ページ ６　教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件 （２）履修指導 １）履修指導体制 社会文化創造研究科では，軸足性と学際性を踏まえた研究指導を担保するため，3名の教員（主指導教員1名，副指導教員2名）による指導体制をとる。副指導教員のうち少なくとも1名は他コースの研究分野の教員とし，分野横断的な研究指導を行えるようにする。指導教員は履修指導・研究指導面だけでなく生活・精神面などの相談など，多岐にわたる修学支援を行う。指導教員については，学生の研究テーマを考慮のうえ，入学後のガイダンスなどにおいて研究テーマの近い教員と学生が協議して決定し，研究科委員会で最終決定する。

に関する対応が必要と判断した場合には，主・副指導教員で情報の共有を図り，必要に応じて学務委員会で検討するなどして対応する。 36ページ ６　教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件 （３）研究指導 １）研究指導体制 本研究科においては，研究指導については，3名の教員（主指導教員１名，副指導教員２名）による指導体制をとる。副指導教員のうち少なくとも１名は他コースの研究分野の教員とし，分野連携によって複数の指導教員で指導にあたる制度を取り入れている。指導教員は，履修指導・研究指導面だけでなく生活・精神面などの相談など，多岐にわたる修学支援を行い，学生が効果的に研究を進められる環境を整える。指導教員は必ずしもメンタルヘルスを専門とはしていないが，小白川キャンパスには，医師，看護師，臨床心理士が勤務し，学生や職員の健康支援を行っている保健管理センターがあり，指導教員が対応に困ったときなどは相談できる体制が整っている。また，山形大学には医学部附属病院があり，精神科医師から助言を受けることができる。 社会文化創造研究科では分野横断的な指導を実施するため，様々な分野の教員が学生指導に携わることになるが，小白川キャンパスでは，キャンパスとして組織の枠にとらわれずに研修会が実施されているため，分野にとらわれずに問題意識を高めることが可能になる利点がある。現在の研修システムを活かし，これまでの事例や対応策を参考にしながら，教員の研修に努めていく。 また，指導教員が学生から精神面での相談を受けた場合，或いは，教員が指導学生の精神面に関する対応が必要と判断した場合には，主・副指導教員で情報の共有を図り，必要に応じて学務委員会で検討するなどして対応する。	35ページ ６　教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件 （３）研究指導 １）研究指導体制 本研究科においては，研究指導については，3名の教員（主指導教員１名，副指導教員２名）による指導体制をとる。副指導教員のうち少なくとも１名は他コースの研究分野の教員とし，分野連携によって複数の指導教員で指導にあたる制度を取り入れている。指導教員は，履修指導・研究指導面だけでなく生活・精神面などの相談など，多岐にわたる修学支援を行い，学生が効果的に研究を進められる環境を整える。

（その他に関する意見）社会文化創造研究科　社会文化創造専攻（M）

13．教員組織の編成に関して、各専門領域の高度な研究能力や実践能力を有し、指導経験を有する教員が適切に配置された教員体制となっていることを説明すること。

（対応）

ご指摘を踏まえ、各専門領域の高度な研究能力や実践能力、指導経験を有する教員を適切に配置するため、研究科を担当する教員は全員、大学の規程に基づいて資格審査を受審していること、および審査の基準について設置の趣旨等を記載した書類に加筆する。

具体的には、研究指導教員の資格判定に当たっては、人格、指導能力、教育・研究業績及び学会・社会における活動を考慮し、かつ判定基準を設定している。

例えば、音楽芸術プログラムにおいては、①担当授業科目の内容に対応する専門分野での学術論文（著書を含む）が 20 編程度あること、②①の業績のうち、レフェリー制度のある全国的学会誌又はそれに相当する学術誌、刊行書等に掲載されたものが 5 編以上あること、③②の業績のうち、最近 7 年以内に発表したものが 2 編以上あることが判定基準となっている。また、実技指導を担当する教員にあっては、①学術論文等が 2 編以上あること、②演奏会等が 50 回以上あること、③コンクール等における受賞歴等については業績とみなす、ことが基準となっている。

スポーツ科学プログラムにおいては、①担当授業科目の内容に対応する専門分野での学術論文が 20 編程度あること、②①の業績のうち、レフェリー制度のある全国的学会誌又はそれに相当する学術誌、刊行書等に掲載されたものが 5 編以上あること、③②の業績のうち、最近 5 年以内に発表したものが 2 編以上あること、④②の業績の中に、高度の技術、技能及び発表を 3 編まで含めることができる、⑤④の業績の中に、全国的な競技記録及び発表を 2 編まで含めることができることが基準となっている。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
25ページ ５　教員組織の編成の考え方及び特色 （１）教員組織の編成 社会文化創造研究科においては，人文社会科学分野，臨床心理学分野，芸術・スポーツ科学分野における専門性を高めるために，現在の社会文化システム研究科および地域教育文化研究科のそれぞれの研究科に所属する各教員の専門分野や教育研究業績を踏まえて以下のコースごとに的確な教員を配置し，組織している。 各教員は専門分野・科目，研究科共通の基盤教育科目，基礎専門科目そして研究科内の分野連携科目などを担当する。研究科を担当する教員は，研究業績や指導経験が十分であるかを確認するために資格審査を受審する。学術論文数、演奏会数、受賞歴等について基準を設定し、研究能力や実践能力を客観的に判定する。	25ページ ５　教員組織の編成の考え方及び特色 （１）教員組織の編成 社会文化創造研究科においては，人文社会科学分野，臨床心理学分野，芸術・スポーツ科学分野における専門性を高めるために，現在の社会文化システム研究科および地域教育文化研究科のそれぞれの研究科に所属する各教員の専門分野や教育研究業績を踏まえて以下のコースごとに的確な教員を配置し，組織している。 各教員は専門分野・科目，研究科共通の基盤教育科目，基礎専門科目そして研究科内の分野連携科目などを担当する。

（その他に関する意見）社会文化創造研究科　社会文化創造専攻（M）

14. 臨床心理学コースにおける教員負担について、学外実習に係る指導や、教員自身の研究時間の確保も必要となることから、適切な教員負担となっているか不明確なため、学外での指導と学内での授業・実習等に関して時間割上の工夫など、特定の教員に負担が偏ることのないような仕組みとなっていることを説明すること。 また、学生についても同様に、公認心理師・臨床心理士の両受験資格の取得を目指す学生や心理学以外の教育課程を経た学生にとっても、学内外の実習や事前事後学習及び論文作成が十分行えるような、適切な学生負担となっていることを説明すること。

（対応）

教員負担及び学生負担については以下のとおりである。

ご指摘を踏まえ、実習レベルを保ちながら、客員教員等の活用と時間割上の工夫により、教員、学生ともに研究や論文作成の時間を確保できるようにしていることを、設置の趣旨等を記載した書類に加筆する。

１．教員負担

実習の内容として、1 年次開講科目と 2 年次開講科目が同時に実施される部分があり（相談室ケースカンファレンス、外部実習の事前事後指導など）、開講している実習時間の合計より教員負担時間は少ない。また、実習担当の非常勤講師（120 時間分）のほか、心理教育相談室に非常勤相談員の雇用があり（195 時間分）、非常勤が担当する面接への陪席や並行面接のセラピストとしての院生の参加は、「担当ケース実習」に充てられる。そのため、院生全員が臨床心理士資格のほか公認心理師資格の取得を希望した場合でも、学内での「担当ケース実習」のために臨床心理士資格を有する教員 5 名が負担する時間は、一人当たり平均週 2 時間程度である。

学外実習は、教員一人につき 1，2 か所を担当する。実習先との事前打ち合わせや実習期間中の訪問（週 1 回）を行うが、近隣の実習先がほとんどであるため、負担は少ない。また、山形県公認心理師・臨床心理士協会との連携協定があり、協会事務局を本学心理教育相談室に置いているため、協会役員や会員である実習先の担当者との連絡調整は容易にできる。

２．学生負担

学部で心理学専攻ではなかった院生は、実質的に公認心理師受験資格を得ることができないため、大学院で選択科目となっている公認心理師科目を履修する必要はない。その場合、論文作成のための学習時間を確保できる時間割上の余裕はある。

公認心理師資格取得を目指す場合は、合計 585 時間の実習が必要である。時間割の工夫により、学内・学外の実習時間の確保と研究時間の確保ができるようにしている。具体的には、相談室でのケース担当が始まる 1 年次後期は、相談が入りやすい午後後半の時間帯

を空けている。木曜日と金曜日は終日授業を入れずに、学外実習や研究に充てられるように配慮している。2 年次は、学外実習が合計 4 週間あるが、学外実習期間以外は相談室でのケース担当実習の時間が週に平均 3 コマ分、カンファレンスが週に 1 コマ分程度であり、論文作成の時間は十分に確保できる。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
54ページ １２　実習の具体的計画 （４）実習レベルの確保の方策 実習レベルの確保の方策として，当コースでは，実習の目的，到達目標，実習の構成，履修にあたっての条件や留意点，手続き（届け出方法）のほか，各実習の概要および詳細，さらには実習手帳の使用方法等について詳細に記載した本学独自の「実習の手引き」ならびに「実習手帳」を作成しており，入学直後に学生に配布している。実習指導オリエンテーションにおいて，これら実習の手引きを活用しながら教員が実習の概要や実習に向き合う心構えについて指導を行っている。 また，学内実習施設である心理教育相談室における相談員としての自覚を持たせることを目的として，心理教育相談室相談研修員登録書式に必要事項を記入の上，相談研修員としての申し込み手続きを行わせている。 学内実習に関しては，専任教員以外に，客員教員（年間 120 時間），非常勤相談員(年間 195 時間)を配置して負担を分散し，グループスーパーバイズ，個人スーパーバイズによる継続的な指導を行うことにより，実習のレベルを確保する。加えて，ケース報告会における複数教員によるスーパーバイズを受けることにより，ケースの多面的な理解に基づく支援について新たな気付きを得る機会を設けている。 また，学外実習については，実習の間，毎日実習手帳にその日の実習内容を記入させ，振り返りを行うとともに，学外実習施設の実習担当者からコメント欄に，アドバイスを記入していただいている。学外実習施設の実習担当者は，いずれも心理支援業務従事期間が 10 年を超える中堅～ベテランから構成されており，実習の質の保証につながるものと思われる。加えて，学外実習期間の前後，及び実習期間中に，専任教員による指導を受ける機会も確保されている。なお，特定の曜日には授業を終日開設しない等，時間割上の工夫等により，教員・院生ともに研究や論文作成の時間を確保できるよう配慮している。	52ページ １２　実習の具体的計画 （４）実習レベルの確保の方策 実習レベルの確保の方策として，当コースでは，実習の目的，到達目標，実習の構成，履修にあたっての条件や留意点，手続き（届け出方法）のほか，各実習の概要および詳細，さらには実習手帳の使用方法等について詳細に記載した本学独自の「実習の手引き」ならびに「実習手帳」を作成しており，入学直後に学生に配布している。実習指導オリエンテーションにおいて，これら実習の手引きを活用しながら教員が実習の概要や実習に向き合う心構えについて指導を行っている。 また，学内実習施設である心理教育相談室における相談員としての自覚を持たせることを目的として，心理教育相談室相談研修員登録書式に必要事項を記入の上，相談研修員としての申し込み手続きを行わせている。 学内実習に関しては，実習指導者である専任教員および客員教員，非常勤相談員が，グループスーパーバイズ，個人スーパーバイズによる継続的な指導を行うことにより，実習のレベルを確保する。加えて，ケース報告会における複数教員によるスーパーバイズを受けることにより，ケースの多面的な理解に基づく支援について新たな気付きを得る機会を設けている。 また，学外実習については，実習の間，毎日実習手帳にその日の実習内容を記入させ，振り返りを行うとともに，学外実習施設の実習担当者からコメント欄に，アドバイスを記入していただいている。学外実習施設の実習担当者は，いずれも心理支援業務従事期間が10年を超える中堅～ベテランから構成されており，実習の質の保証につながるものと思われる。加えて，学外実習期間の前後，及び実習機関中に，専任教員による指導を受ける機会も確保されている。